

川柳塔

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
昭和四十八年九月二十五日印刷
昭和四十八年十月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷五五七号



No. 557

48年度二賞発表

十月号

姉妹品大和錦印



柔道衣 剣道具

警察庁・警視庁
全国府県警察
大阪府警察本部
講道館・御指定

早川繊維工業株式会社
大 阪 支 店

大阪市天王寺区伶人町29番地の1
電 話 (779) 1690~2番

あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ!

豚 焼 焼 餃子
又 焼 饅 売

豚まんの王様、やき豚入り



大 阪・なんば



TEL (641) 0551-2



〈出張店〉 なんば高島屋／虹のまち鹿鳴／心斎橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
京阪デパート／堂島地下センター／中之島サン・ストア／なんば新川店／奈良近鉄百貨店

中島生々庵

ピエロでもいいから噂になりたがり
笑顔の裏にリアルな影はゼニの事
夕焼けこやけ鼻欠げ地藏が明日を告げ
傘寿から米寿白寿と花の道
氣負うても老骨汗ばむ片日照り



秋です

ケタ外れの今年の夏の日照りと雨不足には全国的に苦しみぬいた。朝日グラフ(8・13)を見ていたら、高松市の水不足を報じた写真入りの巻頭に、「人工雨実験や雨ごい盆踊りにもかかわらず、無情の太陽は光り輝く……」とあった。無情の太陽とは言い得てまことに読む人の胸を衝く言葉である。月は無情というのは聞くが、深刻に無情の太陽と聞いたのは初めての経験である。水練学校が開けない位は辛抱するとして、病院関係や福祉施設関係の裏方さんの心労、乳幼児をかかえた大都

会の庶民生活等々、無情の太陽の感は一しおであつたろう。われら老骨、大した障りもなく、日頃の健康が感謝にたえない。九月ともなり朝夕の虫の音と共に、あちこちから川柳大会のたよりが届き、読んでいると懐しい顔が次々に浮かんで来る。秋の訪れは句会たよりから。そして軽るい疲れを覚えながら句会から帰途に就く電車の中で反芻するかずかずの楽しさ。その醍醐味こそは生きがいのコマでもある。

川柳塔十月号

座右の句

凡人になれ一つ捨て一つ捨て

(日 車)

私の句

静けさとあそぶ楽しさみつけたり

本 田 恵 二 朗

川柳塔十月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

秋 如 是 我 聞 ず

中島生々庵……………(1)

川柳初篇研究……………(百二十三)

若本多久志……………(2)

素女経異聞……………

東野 大 八……………(22)

川柳塔(同人作品)……………

若本多久志……………(4)

水煙抄……………

北川春巢選……………(30)

一分間の柳論……………

藤井 春日……………(26)

秀句鑑賞……………(同人吟)

西尾 菜……………(46)

近 詠……………

川村 好 郎……………(47)

川柳中山道六十九次……………(8)

富士野鞍馬……………(40)

鏡台に……………

高鷲亜鈍……………(41)

如是我聞

1

若 本 多 久 志

「丈夫は棺を蓋うて事定まる」という古言があるが、路郎先生を失ってはや八年余を過ぎた今、年を経る毎に、先生から与えられた言葉が、一層胸によみがえってくる昨今である。

私が会社の苦境で毎日、約手に追い廻されていた頃、つい作句不振の理由にしてその愚痴を言ったところ、先生は

「なる程、君の仕事もしんどいだろうが、努力によれば解決がつくという見通しがある。ところが我々芸術に携わる者はもっとしんどいのではないか。……どうしたらよい作品が生れるか。その生涯を打ち込んで、必ずしもいい作品が生れるとは限らない。又、初めからダメだと判っていれば、打ち込んだり、悩んだりはいらないが、それがわからないから苦しんだり悶えたりするのである。

自分は常に「これでよいのか」「これ以上伸びる可能性はないのか」「どうしたら現在の苦渋な作品から脱することが出来るか」と考えながら毎日を突き進んでいる。

48年度路郎賞・川柳塔賞発表

審査風景雑感

48年度二賞中間発表

川柳と松江

通児・紫吻・晃男・祥月・孤呂二・町紅・与根一・鶴丸

母と川柳と

垂井葵水

きのう・きょう

本多柳志

北陸小松川柳大会

板尾岳人

大阪の皆様へ

四方天弘美

近県川柳大会

小浜牧人

初歩教室

本田恵二朗

大萬川柳「かけ持ち」

川村好郎選

柳界展望

(新之助)

本社九月句会

(庸佑)

各地柳壇 (佳句地10選)

川竹松風

「スポーツ」

草深醉升選

一路集「へそくり」

森田布堂選

「社会面」

岡村久志良選

編集後記

(三夫・葉子)

不二田一三夫 (24)

(38)

(42)

(37)

(45)

(51)

(51)

(53)

(50)

(52)

(54)

(56)

(60)

(48)

(48)

(49)

(65)

座右の句

寝転べば畳一帖ふさぐのみ

(路郎)

私の句

女房に買被られたまんま老い

木山 遠二

とにかく停頓してはならないのだ。企業の経営も、作句の道も同じことだよ」と論じられたのであった。

又、ある時「どうも忙しくていい句が出来ない」と訴えたのに対して

「句というものは、いつも巧いのが作れるものではない。仕事や生活が余り忙しい時には誰でも作れないものだ。

ひどく悲しいことが起きた時や、嬉しい出来事があった時も同様である。かと言ってあまりひまな時にも作れないことがある。

では、どういう時に句が生れるかというと、忙しい時、嬉しい時が過ぎ去った後で、人生を静思した時に、台風のように創作欲がやってくるのである。

この時をのがしたら句は生れない。だから、君も作れないときは作らなくてもいい。作っても恐らくロクな句は出来ないだろう。

そんな時はあせらずに諸先輩のよい句を鑑賞したり、文学的な作品を多読することに努めることである。

豆萩君の作品に

みの虫のなんぼ匍うても壁だった

という名句があるが、これなどもそうした後の静思から生れたものであろう」と教えられたのであった。

(この如是我聞は第十章までであるので機会ある度に発表させて頂きます)



若 本 多 久 志 選

和歌山市 垂井葵水

母終焉しばし地球を止めてくれ
世の中のいのちを母に蒐めたし
死の爪となりゆく母の指を組む
朝蟬の輪唱に母おくらるる
黒梓の母に残暑のひとしおに

呉市 植田英詩

大阪市 正本水客

波がしらのひとつひとつが月を抱く
泥かぶることへ夫婦の気がそろう
薄情やないがと常識論を出す
友といて聞き手にまわる仕合せさ
好奇心のない人間が石に似る

香川県 三井酔夢

東大阪市 宮西弥生

限界まで脱げる女だけの夏
真実の愛を賭けてみるグラス
演技派の女の指先きよう動き
宝石の光り較べてる多情
欲求不満らしいミンクだのダイヤだの

岡山県 嘉数千代香

底辺に生き信用の灯を消さず
倅せを掴めば指間からこぼれ
かくしマイクにおんなの性を埋められる
ニンゲンに還れと秋風がささやく
ピフテキのうすさへ家計のぞかれる

岡山県 浜田 久米雄

年のこと言うなと若い人が言う
暑中見舞もらっただけの人へ書き
腹の虫押さえる年になっていた
新聞とテレビで知識つないどき
雷が去んでテレビがもの言わず

倉敷市 本田 恵二郎

定石しか打てぬ男のままで若い
瘦せた手が悟りに似たものをつかみ
解放感へさびしさ交る妻の留守
浜平和西瓜割りそこね割りそこね
小鳥一羽日照り続きへ死に急ぎ

大阪市 小出 智子

茄子の色真夏の朝を整える
見失なうまいと私を見つめている
中年の掌に積む砂の塔
夾竹桃私も強く生きたしと
生きとし生きるものに大地渴わききり

鳥取県 鈴木 村諷子

五指継ぎ合わせて生きる楯とする
扇風機自転公転捻転し
末席の方で参加に意義があり
唇の薄い女へ先入感
貨幣価値 値と俸のズレを知る

倉敷市 小幡 里風

臍に落ちぬ事あり神に鈴を振る
ブランコのそば指切りへ夕焼ける
マネキンに暑さ寒さのない自信
小細工をした顔妻の他人めき
偽善者の素顔を嗤う夜の造花

倉敷市 小野 克枝

今日を頼む夫の背いのたくましさ
化粧無き肌に女の意地を秘め
逆立ちをしたら突然虹が見え
忍従の傘を夫婦で支え合う
感傷の秋も暇無し割烹着

大阪市 山川 阿茶

戎橋乞食も長髪ひげ生やす
或る時は自分の心を愛撫する
敬老のバスでつとめるありがたさ
そよ風に柳は舞いの手でなびき
抱っこして長女はバッグにしがみつき

氷見市 関 美子

耳閉させ風は言葉をつくるから
あれがアセチレンガス宵まつり
引率の旅へ月賦が一つふえ
チボふつとよす気になった国訛り
あぶら蟬一茶になってやりすごし

大阪市 大坂 形水

空き岳の山を残して夏終る

かすり傷ぐらゐに齡か日がかかる
家を持つだけの希みとは淋し

雨の多いドラマ女はからだ売る
空いている方の寿司屋を通り越す

大阪市 不二田 一三夫
ゲームポイント女は逆手考える

何かええことないか——昼寝してしまい
さまざまなポーズで焚火へ女土工

寄席

マージャンでつなぐ出番へ老いる身の
ハイ拍手などとお客を甘くみる

豊中市 戸田 古方

三山が見えて大和は真夏なり

三面鏡こんなにボクの顔が見え
船小屋がどうにも構図になつてこず
自然を愛すという人間のエゴイズム

宝塚市 傍島 静馬

むっとして帰れば妻の母が居り

老眼鏡に拡大鏡でもぼやけ

小遣いを呉れる息子の無事祈る

スーパでアルミ貨ほそぼそ生きており

名古屋 吉田 水車

緑之助氏へ

潮騒のさやかに句碑をうたいあげ
稼ぎのない蟻へ夕陽のいつまでも

フランスの鰻もグロに生れつき
到来の種なしぶどうや柳翁忌

高槻市 若柳 潮花
あまえても拗ねてもこっち向かぬひと

川風へ明治の色の欲しい夜
性悲し切れた男の影を踏む

病人の汗をいたわる風も無く

尼崎市 黒川 紫香

戸を開けてお留守でつかとのぞきこみ

パチンコ屋の前でしばらく涼をとり

縁側でよばれる麦茶も夏のもの

美濃谷汲寺

谷汲の裏へ廻れば蟬時雨

青森市 工藤 甲吉

ステテコで我れ天皇を羨まず

千天の慈雨菅笠の顔が笑み

母はただ笑い仏となつて老い

千慮の一失口止めを子に忘れ

鳥取市 河村 日満

若やいで妻も筆とる天の川

妻はどこに逃げたか暑い暑い昼

うたた寝を嚏が起す風となり

痛いところがうて入院よく眠り

城陽市

大鶴 喜由

衣と化粧とればどこにもいる女

一たす一が一になるよな恋をして
でんとして富士は男のつらがまえ
結納のあと嘘一つばれ二つばれ

泉佐野市 阿 万 万 的

蓮の華お塚を古い色にする

テレビドラマが素朴さ盗んでいった村

山肌の煙あすこも人が住み

松の対話昔へつづく山出城

奈良県 石 倉 旅 風

喉の皺見えてネクタイ締めなおし

栄養価どうあろうとも無精卵

もういち度寝なおして聞く雨の音

明治村気を吐くものは形だけ

藤井寺市 西 いわを

咲く花の大きさを知る土の糧

話題なき俚に夕食早くすみ

見も知らぬ人の話を聞く愚か

京都大徳寺

緑陰に酒温めず普茶料理

門真市 福 島 鉄 児

飲めぬ僕になぜか奴は酌ぎたがり

眼に見えぬ疲れやっぱ無理な旅

朝顔の一輪団地を朝にする

孫満一才を迎える

家中の夢を背負うて孫育ち

下関市 石 川 侃 流 洞

五十にも若さがあったバンタロン
移動する木蔭を犬も心得る

燃えあがる邪恋カンナは静かにて
百姓でないのもあえぐ照り続き

岡山県 浜 野 奇 童

二十五年目の同窓会(三句)

乾盃へ恩師の腰の伸びきらず

唇のそこから面影よみがえり

今はない母校の歌がこだまする

四十にして惑う心の置き所

倉敷市 水 粉 千 翁

遮断機がまだ降りている夜のベッド

もどかしさうれしさ女心活け

愛情を分けるに夫婦もめている

ぶつけ合う心ふたりのものになり

高槻市 福 田 丁 路

秋を呼ぶ風爽やかに水清し

本物のピアノを孫にせがまれる

冥土への旅の際なる親心

嘘か真か粋な目くばせ

大阪市 西 出 一 栄

沈黙考へ訪れる睡魔

それぞれに話題が異うピヤガーデン

今日の汗飲み干すジョッキ大にする

綿菓子に想い出多い夏まつり

大阪市 天正千梢

消えかけた愛 乗鞍で手をひかれ

年輪を重ね錯覚の愛に酔い

おはようさんで日本晴れの箸をとり

撒き餌と知らず才女おぼれかけ

竹原市 山内静水

同窓会歌い尽して満ちたりる

お先にと妻は真んから寝ておらず

三十年添うて「孫の手」及ばざり

安心の出来る利殖の寡が知れ

大阪市 福井野迷路

ユーモアへ翌朝も一度微笑させ

口論へそれだんがなと云う一本

名を忘れ握手に入れた馬鹿力

むずかしい事抜きやとて古い友

米子市 八木千代

鈴虫の初恋秋立つ風の夜に

蝕ばんだ乳房に溜る女の血

コバルト照射まだ廃車とはさせぬ身の

紅すこし刷けと鏡にささやかれ

米子市 林瑞枝

若い男性息子に見えて歳を知る

急病に別れ話はいつか消え

湯上りの灯影若さがまだ残り

ひたすらの愛寝化粧の美しく

島根県 堀江正朗

夜が更けて頑固の隅が崩れかけ

正座して次の動きの音を待ち

その色が僕に浮かばぬ月見草

タイミング合わず佗しき湧きあがり

大阪市 中川滋雀

小瓶を空け閑白の座をもたせ

筆枯れた便りにお人柄にじむ

灰皿にねじふせられている焦り

乗りかけた舟だ妥協の路を選ぶ

東大阪市 久米奈良子

片恋を下絃の月へ埋めて待ち

吉と出たみくじへ心決めかねて

子の顔が次つき浮かぶ岐路に佇つ

朝夢のたしかに友のペン届く

松江市 舟木与根一

誤解生む顔の造りと気がつかず

包丁の器用さ目立つ左利き

松江上水道危機

水郷の蛇口なさない音を立て

亡母の新盆

亡母が焚いた場所で迎え火焚き憶う

神戸市 仲 どんたく

亡き人の声で鸚鵡の咳ばらい

蠅叩きごときに無念とぼっかぶり
糟糠の妻 糟糠のままに老い

白馬にて

肺洗うように息する山の朝

大阪市 有 信 新之助

横車と気付かぬ金ができている

外遊は同じ構図で帰って来

土建屋がひしめく国土狭ますざる

ファッションをまとえる体だけではでき

大阪市 本 多 柳 志

お風呂屋で会えば話のわかる人

セールのように仲人勧めに来

旅からのハガキで小さい義理を立て

三行で値上げが決まる新聞社

姫路市 梅 谿 庵 不 醉

税務署が来た夢覚めて油汗

暑中見舞また一枚が永の旅

ついてない話相手は飲めぬ口

定休日マネキンみんな脱いでいる

(前月分)

奈良県 石 倉 旅 風

飲むさかい達者なんやと言いくるめ

出会うまで蠅とり蜘蛛のひとり旅

太陽が渴と怒かって水飢饉

日照権鳴りを鎮めて堪える夏

桜井市 岩 本 雀 踊 子

一匹で生きるうたぐり深き目で
ゼニのない暮しになれた米を研ぐ
見ざる云わざる埴輪の耳よ何をきく
消えて行く尾灯をつつむ夜の音

神戸市 小 濱 牧 人

一步一步進む初心を失わず

札束へ人のこころの脆きかな

胸に抱く秘密日に日に重くなり

ふるさとの昔交らぬ泥鰌汁

富田林市 板 尾 岳 人

好きだから金剛山の下で住み

閑志ない男は去れと云う金剛

噴火して怒れ金剛男なら

美しい山だが女房もう妬かず

泉大津市 村 上 春 巳

夏休み小さな客に襲われる

この辺で泳いだとこに発電所

三回忌親父の墓に蟬しぐれ

岡寺へ四十の坂を頼みに来

奈良市 宮 口 笛 生

盆の月思いきり泣きたい母の近く

盆の月亡母の魂どのあたり

盆の月真赤にもえて通夜の席

おじいちゃん長生きしてやと慰める

今治市 越 智 一 水

鼻に汗かいて女が嘘を言う
掌へ愛を秘めてる観世音

誠実な父があまりに無力すぎ
語るにはうちわの風がやはりよし

松江市 小林 孤呂二

思いきり剪れぬ枝なり生きている

単身赴任などない職で羨まれ
有料道路の真つすぐで情緒なく

尺貫法に換算して話す父が在り

京都市 松川 杜的

清水寺「成就院」にて

借景の一基に重ねてえぼし岩
かげろう灯籠要に坐る位置があり

大徳寺「孤蓬庵」にて(二句)

忘筌の茶室一雨欲しい苔の青

人生の道標ふっと見失う日もあって

兵庫県 遠山 可住

気づつないお客が去んで西瓜切る

思い出を語る酒まで弱くなり

人生にはじめて耐えた肩を抱く

思索なき女に自然ひろすぎる

倉敷市 能登原 白水

煩惱を捨てる私に海がある

襲名の重さがしみる雲の道

夏の海睨んで漁夫よ何憶う

毒舌の中で男を磨かれる

小松市 馬場 魚山

捨てる気の表札引越しの荷にまじり

引越しへ本籍だけは置いて来る

ドラマだから迷宮人がない

盤台の魚 産地の名を背負い

倉敷市 藤井 春日

娘の料理ファッションモデルのような味

よき伴侶今日から坂道かばい合い

犬抱いて四十女の満ち足れり

橋山へ背負うて呉れる子もおらず

和歌山市 野村 太茂津

錆の浮く鎚に父の指紋生き

柄握る感触瞬時の父の肌

嘘だけは言うなと刀の肌匂う

辛い道選んで笑顔くずさない

西宮市 藤村 べ女

わが影に重なる影は五人の子

新幹線はっしはっしと灯り飛ぶ

夕焼へ子供唄の唄がよくそろう

時雨する夜は鏡の私が泣いていた

松江市 恒松 町紅

人間不信部下も上司もそう思い

鉄砲水天叱責のムチ下し

袈裟までも憎い労使のこぜり合い

世間並の夫婦で茶湯の匂う夜

大阪市

河 股 緑 水

求人欄ふと読み耽る日がつづき

振り向かず走るをよしとする別れ

あと一歩そんな女に見えてくる

寝に帰るだけの家賃がまた上り

西宮市

島 居 百 酒

あっさりと靡かれてから興がさめ

嘘にして底う嘘に自責なく

縁起の理説いて妄執の中に活き

賽銭に伝言をする願いごと

大阪市

河 井 庸 佑

どこからともなく秋風が吹いてくる

誕生日忘れられたと子がすねる

新築へ金策までもかくチラシ

うちの子が済んだで帰る運動会

八尾市

香 川 酔 々

水不足知らぬふるさと清水湧く

空っぽの頭で雨を聞く坐禪

小春日の仁王も睡い白柳忌

投げやりな男が濡れる俄雨

倉敷市

野 田 素 身 郎

蟬時雨墓標は白く黙すのみ

八月十五日を知らない部下と飲みあかし

招かれた理由が終るころわかり

あと一句の下五に苦吟する残暑

倉敷市

竹 内 翁 童

手付金これが苦勞のはじめです

消夏法お湯の熱さにたえている

試行錯誤続いて人生の日暮れる

母校訪問

面影がすっかり消えてた新校舎

尼崎市

高 津 徹 也

大杉のてっぺんを指し子に教え

圧倒す何をもって部長の座

内緒とはちよっとスリルがこもってる

自信あるらしネクタイをしめ直し

笠岡市

高 木 桃 里

無形文化財白石踊（二句）

源平を口説く音頭へバチが舞い

揺りかごの夢 風鈴にさそわれる

半径を縮めて老いの旅を撰り

絵馬堂にまだ忠孝が生きている

枚方市

宮 川 珠 笑

うさ晴らすビールも同じ溢れよう

避暑三日潮の香鼻を刺しはじめ

雨が降りそうだと風鈴まではしやぎ

一年の無沙汰を墓地の草が責め

竹原市

森 井 菁 居

長男手術（一句）

親の目にちと荒っぽい医師のメス
正論を吐く拙弁が氣にならず
酒に知恵借りる愚かも飲めるから

八月の六日をカンナの朱が平和

竹原市 時 広 一 路

盃に声なし今日を悔いている
ひよっとこの面をかぶって切り抜ける
茜雲孤独な人へ語りかけ
人形の顔動かしている心

大阪市 川 口 弘 生

入選もその人柄が匂う文字
親しみの挨拶 白い歯がこぼれ
あんな時あったと夫婦でみる子連れ
揉み手して違約の汗をすり潰し

倉敷市 松 下 梁 水

前進あるのみ一匹の蟻として
方言のムードで酔わす旅の宿
酒という字でもむかつく二日酔い
散るすべも知らず造花が褪せている

大阪市 江 城 修 史

だまされた日の合鍵は温かった
三猿になって未練のない別れ
媚知らぬ人生露地の隅に果て
旅一夜潮騒亡父の声と聞く

富田林市 岩 田 美 代

絶対のものはあるとは病んでいる
ぼっかりと訣れて来たよるちぎれ雲
毒だみの花の白さの憎悪感
のりきいたゆかた男のこまこすぎ

富田林市 木 村 弥 栄 子

幼妻母の心になり切れず
倅を女の弱さつなぎとめ
捨て切れぬ誇りに足をすくわれる
七彩のどれが私か虹の私語

大阪市 金 井 文 秋

原点で決断欠けた苦が続き
まだ若いのだと自分に云い聞かせ
盆栽の果実見られるだけに生り
ご用聞きつかまえ保守のよさを説き

大阪市 宮 尾 あ い き

珍客へゴキブリまでしやしやり出て
詩情涸れた心うるほす雨になり
久し振りの雨に植木と濡れてみる
慈雨そろそろ仏送りのじやまになり

大阪市 河 野 君 子

起き抜けの朝の夫婦に嘘がない
旅プラン夢盛るほどに空しさも
不快最高炎えるカンナが妬ましく
盆休暇消化しきれず妻の愚痴

大東市 土 岐 ト ク 子

悲しみがふえる怒りで回向する
寒空に亡夫を見上げた星はどこ
夫婦とはかくも哀れかうら盆会
とりどりの思い新茶にはぐれ出す

広島県 高橋 鬼焼

古里の闇それでよし甘い風
サングラスはずそう過疎の空の青
叩かれた頬から愛がよみがえり
一瞬の稲妻闇を詩とする

東大阪市 竹中 肖二

辛口の父へ珍珠の詰め合せ
草に臥す詩人にきらめく星がある
ささやきの甘さに男踊らされ
幸運な風に流れたホームラン

大阪市 飛田 好一

子の年を数えて迎う終戦忌
血のきずな少く姿も母のもの
歩道橋ネオン夕陽の交叉する
それぞれの思いが帰る盆列車

柏原市 大峠 可動

青春の日記騒々しく生きる
貧しさを蹴って世間の風に向く
真実が欲しくておんな剣となり
ささやかな余裕の中を妻と駆け

三重県 川上 大輪

派手かしらなどとやっぱり欲しい柄
合槌は打って意見は別に持ち
扇風機客へ廻していい話

高野山

宿坊のここまで自動販売機

守口市 村田 瓢太

病院で過ごし人間のよろさ知る
見舞に來て見舞の品をもろて去に
來てうれし帰ればホツとするも孫
男知らぬままけっぺきに老けてゆき

大阪市 神谷 凡九郎

公害と科学 人間サンド出来上がる
常識と云う名に人間逃げ込んで
振りむいて意味ある日々となる願い
美辞麗句 NOWな感じのない男

倉吉市 奥谷 弘朗

執行部一任となるお膳立て
金と銀駒をにぎったままで負け
支持率が落ちても首相よくしゃべる

松江市 中川 晃男

松江市異常渇水
水郷の看板が泣く水ききん
盆の墓供える水も御持参で
待っている台風またも横へそれ

島根県 藤井 明朗

欲で貯めてためて他人が継いでくれ

美人と言われて婚気定まらず

新築へ苦勞を捨てて古畳

岡山県 直原 七面山

妬心を包む真白きエプロン

亡妻に似たホステスにかしづかれ

盗まれた唇なくなつては居らず

大阪府 木村 水洞

高度成長幹線道路渋滞し

盆栽に気兼ねしてやる水不足

寄付の額だけは酔うて来る長屋

松江市 岡崎 祥月

うらみの目つくる晴、晴、今日も晴

初対面句のイメージとちがう人

役得の強味行列横に見る

大阪府 兄島 与呂志

緑之助さんの句碑

海猫の鳴声に忘れられぬ碑

出雲句会にて

素朴さに負けて涙ポロリと落ち

M子さんの退職

日々素直なりしままの女の去り際

鳥取県 清水 一保

雨を待つ心は知らず蟬しぐれ

下宿代もう来る頃を子の便り

喰い溜め出来ぬを帰省の子と笑い

愛媛県 渡辺 曉童

電気代暑さ寒さに安からず
自責点それ見たことと言わぬ妻
まけたたに見るうまい世渡り

姫路市 大江 秋月

通訳も連れて外孫やって来た

足場組む土工の肌に傷のあと

爛ざまし妻松の木にかけてやり

平田市 久家 代仕男

照り続き空水筒へ退社ベル

水飢饉だれも朝顔など賞めず

盆栽の水を近所にうらやまれ

岸和田市 福浦 勝晴

聖書読む窓辺に秋が忍びよる

泳がねばならず泳げぬ激しい世

スイッチをひねると若い者同士

岡山県 池田 古心

孫の凝る釣りは叱れず血が流れ

じらしたら燃えんか女のテクニク

趣味と云う趣味が庭の草を取り

松江市 柳 楽鶴丸

神様の軍配にもある差し違い

男にて候デラックスな車とマイホーム

夾竹桃真紅に燃えて原爆忌

東大阪市 本多 清人

若者の帰省へそつとジュース代

若者の長所ばかりを意識する

退社した若者から来た見舞状

さと帰り台所が狭い嫁同士

ふるさと開発

魔の橋が不気味に光る夜の海

村出入りするのにいちいち料金徴収所

宇部市 平田実男

扇風機団扇の風情を取って回し

マイナスの面考えぬ整形美

盆踊り齡を忘れた腰が伸び

大阪市 黒田真砂

嘘のない人生星を頂いて

風鈴の今日は心に沁みる音

体験が寡婦の人生觀を変え

愛媛県 村上旭童

夏ばての足が運んだもらい水

葉を落としながら密柑も雨を待ち

共白髪どころかそろりそろりはげ

八尾市 古川鶴声

自からが踊っただけなりハイジャック

改造、自然の怒り崩る崖

満点の女房と賞めて敷かれてる

広島市 山田季賛

病むベッド外は静かな梅雨の雨

パチンコがやりたいと思う病むベッド

退院をしてから人生觀変り

島根県 小砂白汀

受け売りにしては話がまずすぎる

わが胸に音なく揺れるマスコット

絢爛と姿づくりにされた鯛

八尾市 飯田悦郎

還暦の鎖がっちり共白髪

手で話す会話に暗い影みせる

張り切ったブラウス大人という乳房

大阪市 今西章雅

鴉不満鳴けば人間不吉がる

危期感へ血判議員時代めき

地金では売らず小判になる黄金

竹原市 小島蘭幸

友情の輪の中で泣く男泣く

断絶の上と下とにあるテレビ

白が好き女の過去はどんな色

笠岡市 松本忠三

女房の管理下週休二日制

やれやれと思えば此処は指定席

言論の自由女給仕の余暇

倉敷市 谷井扇水

頼られる視線に惹く甘え

真実の叫びはどもるのを恥じず
確認をとりつけに來たうす笑ひ

新宮市 大矢 十郎

人間ドック静脈のない人で混み

青い目のどれもて來てもスター顔

枯れるとも知らずあの日の田植唄

岸和田市 葛城 伊三郎

田を売った金じりじりと減って行き

雨降らぬ事まで政府のせいにされ

売れ残る品へ約手の日が迫まり

出雲市 原 独仙

節電節水列島脳軟化

乱れ髪ゆっくり逢えたねと鏡

松江水不足

水恋しここ掘れワンワンでも出ない

大阪市 西川 誓二

インフレは家計の砦に飛沫あげ

P C Bと云う横文字の恐怖症

七人の敵へ武装をする終業ベル

岡山県 出原 敬一

いつもの木へいつもの蟬の鳴く暑さ

おしめりの雨にかみなり二つ落ち

鉄を切る友猥談の顔でなし

倉吉市 渡辺 菩句

引越しを出張中に済ましてる

喫茶店今日もよく寝る客がいる

パチンコをしてるに金を借りに来る

富田林市 浅川 八郎

針金をサツキの枝に老のエゴ

空も見ず明日は雨だと神経痛

愛かなしすっきりせぬまま又孕み

大阪市 室谷 徹舟

話し合う余地なくなった時も酒

おみこしが車で通る夏祭り

待っている時には台風そっぽ向き

八尾市 大路 美幸

ほんのりと崩れかかったもたせ酒

人情の渴きへ呻るコップ酒

揺れ止まぬレールの音聞く忘れ酒

東大阪市 斉藤 三十四

還暦の夏だ保健薬の世話になり

渡り鳥が來て觀光の村となり

戦争の体験冷汗のことにふれ

香川県 岡田 拳法

重箱の隅だけつつき野寛です

養老院親放り出した過去を持ち

ぬるい手の読みの深さが分りかけ

東大阪市

桑原喜風

見栄ほどに兎は喜こばぬ鯉轢

早魃よ人間業の弱さ知る

作業衣も鉄の匂いにパパ帰る

生駒市

草深酔升

一坪の庭でも余生忙しく

人生はさてこれからと古稀近し

落日へまだまだ続く蟻の列

兵庫県

河原みのる

北海道とところどころ

船の朝さすがカズの子とは嬉し

啄木が歩きたかろう砂がない

北海は大沼とても松島や

羽曳野市

塩満敏

田を売ったお金で庭石買っており

鹿の住む奈良へはるばる墨買いに

大阪にほれてとうとう家も建て

大阪府

玉置重人

スケジュール通り団体食べさされ

娘結婚二句

うちかけが似合う娘と知らなんだ

娘を奪った婿憎らしい男まえ

軍歴は無いがトップに軍歌出し

大阪市

神田秀峰

換気栓今夜のお菜嗅ぎ当てる

休耕と増産政治は気尽もの

橿原市

岩井本蔭棒

憎しみを帳消しにして死を悼み

葬列の足も天寿という軽さ

訓練へや々と消火器目を覚まし

堺市

伏見茂美

高野山にて二句

元騎兵高野の馬車に目がぬれる

芭蕉の句碑十人十色にかなを読み

しじみ貝松江の朝の膳にあり

諫早市

原田明春

うだるような暑さは知らず富士の峰

国立だ私立だおやじやせほそり

管理職お流れ恭しく飲んで去に

東大阪市

竹中綾女

ロッカーの秘密三日であばかれる

環状線の客なごませる月見草

友急死

初七日の御詠歌を聞き遺影笑む

堺市

高橋千万子

やりばない心の迷い香をたく

愛たしか握手の痛さうれしい日

今日かぎりの花へもそつと水をやる

富田林市

和田 維久子

慈雨とても三日続けばいやな雨

八十の年輪雑音遠ざける

振り出しのようにベテラン慎しく

大阪市

柳 原 静 香

倅せははかなきものと遠火花

公害の世に妊りし娘を案じ

日本砂漠人の心も干からびて

島根県

中 島 英 子

枕辺へトカゲの見舞いうろたえる

陽にあえぐ花も私のように瘦せ

諦めることにも馴れて今日を生き

島根県

榊 原 秀 子

夏まけの夫をすまなく送り出し

青蚊帳へ昔にかえる夢結ぶ

闘争のおくれを駅で待つ会話

大阪市

藤 田 頂留子

高野山参詣(一句)

奥の院呉越同舟こけむして
早買いを悔やますように大バーゲン

待ちかねたけれども雨はやはり嫌や

島根県

榊 みどり

思い出を残そう娘との旅をゆく

ともしびと心一つに読みふける

旅疲れ朝陽に流し心みつ

新宮市

小 林 入 道

山一つ越えて明暗なつの雨

売店の手伝いもする副会長

萩の花月に媚びてる風情みせ

大阪市

津 守 柳 信

物云わぬ犬のつわりはやるせない

かたくなな己れを笑う白い杖

西 尾 葉

宿泊衣はぐれたように云うている

湯の街の朝の散歩で買った苗

湯の宿のロビー地方版という写真

絵葉書に河鹿の声の一句かな

母歿し

お土産を買う楽しさが一つ減り

菊 沢 小松園

払わねば私が火傷する火の粉
よく出来て居ますと褒めて寄り附かず

大学を出てから話囃み合わず
アンコールの利かぬ人生たそがれる
人間の型をABCに分け

姪結婚

四十五の初婚へ何を言うべきや
花の香も失せてわびしや角隠し

八・一五記念日

どうしてか敗戦記念日と言わず
コンサイス破ってタバコ巻いた日よ
その朝もたしかイモ粥わけて食い

若本 多久志

北川 春巢

近 詠

須坂市 高峰 柳 児

物価高とぼとぼ年金追いかける
逆境へまだまだ耐える無神論
白足袋の白さ師匠にある折り目

大洲市 米沢 暁 明

風鈴も鳴らないほどに建てこんで
婆ちゃんのおのろけ押しかけ女房です
金婚のまだこれからという余生

今治市 月原 宵 明

軍歌集元軍曹の眼に戻り
サイレンに敗者は胸をえぐられる

姉郷墓参・同級会（四八・八）

二尺巾の墓への道も舗装され
ふるさとの過疎 学校は校舎だけ
一期一会ふるさとの友みな達者
弥陀如来の前で長生き誓い合い
墓参から帰ればまたも働き蜂

川村 好郎

療養の目に浮雲は動かない

今日もまた逝かれた報せ聞く残暑
玄関まで悔ゆる心を連れ戻り
お噂はかねがね何も知ってはず
両親の方が誓詞をしかと聴く

縁台に招じて古い艶ばなし

岐阜市 市川 鱗 魚

その先を言わずすぎ穂でござん
灯を消して寡婦に秋とは静かすぎ
民と知る酒にあぐらも男なる

東京都 池田 吞 歩

民主々義言うて解らぬ奴が殖え
殴りたいけど殴れない民主々義
人は人俺は俺だと民主々義

今治市 長野 文 庫

演出は交通公社型の旅
薄くなりそう凍結したい髪
熱暑厳し畑も日記も白くなり

川傍柳 初篇研究

(百二十三)

前田喜代人 川端柳風
故
岡崎重義 高須啞三味
清博美丸 十府
藤井和雄 岡田甫

720 店屋の傘で小網丁迄帰り

菅江

高須「店屋の傘」はテンヤのカサ。女郎屋の傘を借りて帰って来る男で、日本橋の小網町までくれば、その荒布橋を渡った先の横町が傘屋や下駄屋のならんでいる照降横町で傘が買える——という設定の句であるが、何も傘はそこまで来なくても買えたと思うので、少し無理な句と思うが……。

テンヤとはシモタヤに対して見世屋の意でここでは「普通の見世屋」では、どこと限定できないから「女郎屋」と一応解したのである。

岡崎「川柳大辞典」には「夕立で照降町から」と略註してある。

前田「前解に賛。下駄等売っている照降町から、傘を買わずに、店屋（料理屋）から傘をかりて小網町まで帰るとは「俺はてんやに顔がきくんだぞ」との見栄（みえ）も示したのであろう。」

清「句解は礎橋に賛。但し高須さんは元吉原付近の地理を誤解されている。元吉原から日本橋に帰える時は親仁橋が手前になり照降町を通過して行くのである。」

藤井「三越の包装紙を誇らしげにするのと同様「総まがき」の店の傘を借りて得意気に帰ってきたのであろう。」

丸「店屋は多く食物店に対しての語であるが、広く見世屋の意にも使われ、時には女郎屋をいうことがあることは先刻ご承知の通り、礎橋は女郎屋と解しておられるが小生は照降町の傘屋と見る。小網町を特に持ち出したのは「小雨」にきかせたものではないなからうか（作者菅江は相当に狂句臭の多い人）と見ると、照降町に所用に出かけた人が俄雨に会い、店の傘を借りて、ようやく小降りになった小網町まで帰って来たということになる。

岡田「吉原では傘など決して貸さず、大門まで客を送り、客はそこからカゴで帰る。」

（それだけに遊興代しか持って行かぬ男は、いざ雪だ、などとなると身がちむ思ひだった）。句の「店屋の傘」は越後屋の貸傘だと思う。小網町は越後屋のある駿河町からは目と鼻のところ。ただで貸してやるのだから、どうせなら濡れるのはつまらぬ、越後屋の傘を借りて自家まで。女房に「なんだね、一ト走り駆けてくればいいのに……」といわれそうな場面。

母親に娘へのことをかわかさね

泉河

高須「「へのこ」は使えば濡れる、使わねば乾いているという考えから、「へのこをかわかさね」ということは「使用しない時がある」ということで、その「使用しない」のが「母親のため」というのだからおだやかでない。この母親、若くして後家になったのであろうか、つい娘を借用してしまったのであろうか。或いは、既出娘をねらったがお袋が出来る

川柳塔社主催

48年度・二賞発表句会と同人総会

会場

大阪府中小企業文化会館(5F)

電話(771) 4096

(天王寺区上汐町五丁目二五・地下鉄谷町下車)

柳話 中島生々庵

★路郎賞・川柳塔賞表彰

兼題

「点」 正本水客選

「異色」 菊沢小松園選

「ダブル」 若本多久志選

「吉報」 西尾 栗選

会費 300円

(席題二題)

★投句だけの方は郵券五十円封入

▼二賞発表句会は午後五時から

です。

10月7日 午後一時開場

11月の兼題 「肉眼」「瘦身」「風」「豊か」

流で、聲に入る前からとも考えられるが、この句はそこまで考える必要はなからう。ただ「芋田楽」の句であることは明らか。とにかく、この最後頁の六句に、四句もえげつない句があるのは、編者の計画か？特にこの句が「川傍柳」初篇の最後を飾っているのは、いわゆる「大尾」のつもりであろうか。

岡崎「芋田楽」に違いはないが「かわかされ」の「乾かす」は、ただで人の物を使ったり見たりする。こと。もともと娘に専用権があるのに、母親が盗用しているのである。また、秋がわきぬくより早く出合し、末二・一の「秋がわき」は、秋の気候には食欲の増

進するともに性欲が熾烈になることだが、この「かわき」の意にとると、聲を母親に横取りされて、娘の方は飢えてい前田「かわき」は「秋がわき」と同。情欲のたかぶること。よくよくのかわき婆にア浅黄寄りがあり、前説に賛。

藤井「乾かすは、ただで人のものを使う」とだから、「秋がわき」までは解さずとも母親に聲を横取りされたと解して充分ではあるまいか。煙草の句に

しめつてもいいと一服かわかされ高須さん、敬服。

丸「芋田楽替」「かわかさ」は、藤井説の

ように見る。

岡田「芋田楽説は勿論だが、「かわかさ」は岡崎説の前半、藤井説の通り、タダで人のものを使用することです。「秋がわき」までは考えすぎ。

(これでめでたくこの輪講も完結。長い間、貴重な紙面を提供してくださった、「川柳雑誌」および本誌「川柳塔」に厚く御礼申しあげます。(岡田 甫)

(追記)「川傍柳」初篇輪講は以上で一応終了したわけですが、故高須氏から引きついで後、落丁分が届けられましたので、追加原稿を次号から発表させていただきます。(川端柳風)

素女経異聞

東野大八

ある日の新聞広告に「素女経入門」岡本隆三著なる大きなトッパン文字がいきなりの態で眼についた。キャッチフレーズにいわく

「古代中国が生んだ絶倫の性医学」

「べつするなり私の脳裡に」黄帝問うていわく「素女答えていわく」の旧活字もそそけだった。黒々とした文字の行列がくつきりと浮かび上った。この柳誌ほどの大ききで白い厚表紙、中味の紙は仙花紙の黄色い五十ペーじ程度のものではあった。背文字に小さく「素女経解義」とある。これが私の脳裡に浮かびあがった「懐しの素女経」のイメージであった。

（さあて——あの白い本を手にしたのは何年ごろであったか）

そうだ、昭和十四年ごろだったか、古い古い話になる、と私は回想してブ然となる。

私の同僚であった社では先輩のHが、満映の助監督になった。ある日、彼は私との茶のみ話の席で、一包みの重いものを取り出し、「これはちと目と目を憚る本なのだが、そ

れだけに好き者にみせれば立ち所に欲しがれる。頒布して君の小遣いの足しにしるよ」

それが問題の素女経だったのである。

眼を通してみると成程、房中術の奥儀とおぼしきものが各頁に散見された。時に世情は国策の線に副つての緊縮体制下で万事が氣づまりな生活のあけくれ。到底表通りにまかり通るしろものではない。それ故にこそ、一層この秘本は価値ある本領を発揮するわけである。私は雀躍して引受けた。

当時の私は奉天在勤で、満鉄・鉄道総局にも出入りしていた。若い私は直ちに行動を開始した。秘本は十一冊あった。カモはすべてが満鉄の当時の理事クラス。買ってくれたイトねんごろなる人達の名は今も一人残らず記憶しているが、モノがモノだけにここでは割愛しよう。なかには当時としては大枚の金十円に、にぎりずしの豪華なヒル飯まで馳走してくれた御仁もいた。十円といえは、十間房の鮮媚なら、明し花四泊分、特級の日本メスメとて二夜でツリがきた。後宮二千の美姫を

御するに九法八益七損の奥儀——このテキストを手にも、まさに巫山の法悦に浸るというネハンの王侯に比すべき往時の私といえた。ああ、理論と実践の見事なる合一。だが、好事魔多しとやら、巫山に雲雨はつきものと身をもつてそれを体験する破目と相なつた。というのは、素女経本に色ほけの度合いも過ぎたころおい、新京勤めのHがあたふたと奉天に現れ、色をなしていった。

「エライこっちゃあ、とうとうあいつが挙げられた」

「あいつとはなんだ」素女経だよ「ゲエツ」という一幕のあと、話をきけばこうだ。

あの秘本・素女経の出版者は山口文雄。三百部すべて全部さげけたのは御同慶の至りだが、好評に氣をよくして忽三版の再印刷の段階ですべてがペア。というのは引受けた印刷所の第三国人の文選工が、分け前に文句をつけたが話にならず、かくてその筋へのたれ込みとなつたという次第。

「山口文雄といえは炭鉱成金で李香蘭の実父じゃないの。娘が今を時めく関東軍直轄の国策女優、軍の四課にでも頼めよ」

と私はいささか版元の名をきいて肩の荷を下ろしかけたのに対し、Hは、その印刷屋がこの奉天で、挙げたのがこの奉天領事館警察なんだ。領警と軍、しかも関東軍の新京とことかわり管轄がいふの奉天では全くのセンキ筋その上もはやコトは万事手遅れの段階。

「関東軍の高級将校ときたら稀代の色好みその癖、こんな話になると木仏金仏なみにす

つとげやがる。軍と領警ではモトモトウマの合う間柄じゃないがね」

「お前さんのいる満映といえやあ、満州国の超大ボス甘粕旦那がいるじゃあないの。もつとも今回のエロ本騒ぎには役不足だとは思うがね」結局、こんなことのやりとりの挙句、私が顔なじみの奉天領警のその筋に工作して、もみけし、もしくは執行猶予の方法をとって貰うということに落ちついた。イイ目をしただけに当方も負い目十分、イヤもオウもの話ではないわけだ。

かくて私は私の作戦に応じて、このもみ消しの初手の筋を満鉄の秘書課と、警保局のある幹部にネライを定めた。だが秘書課は適当に逃げをうち、警保局だけが頼みの綱となった。その頼みの人物Kは、領警の保安主任と郷里も大学も同じ、役務上にも若干つながりもある。まさに頼みの綱も大ナワの方だ。

私はやがて袖の下の若干を用意し、Kとの密会にこぎつけた。Kはうさん臭げに用件とはなんです？と大きな鼻先を私の鼻柱へくっつけそうにして声をこらしそう切り出した。「実は、ごく内密のごく二人っ切り話なんですがね、実はズバリといえバエロ本」そう切り出したとたん、相手の鼻先があっという間に真白になった。この一瞬の意外な反応にこちらの鼻先も突如、一陣の寒気が走った。くどくなるので割愛するが、エロ本の一語で忽ち相手が顔面蒼白になるのも道理、その時点で、満鉄社員間一部有志の間で、当方とは別な春本事件に火がついていたのである。

る。知る人ぞ知るそれを『満鉄社員修羅八荒事件』という。

この本は、後日押収した証拠品として私も眼にしたことだが、浮世絵風色刷の春画をふんだんにあしらひ、手漉し和紙総ルビ付、宋朝体活字の三百頁という超豪華本で、艶麗な歌麿五色墨の浴後の美人の表紙絵の隅には勸亭流の文字で『好色修羅八荒』とある。まるで町村議会の議事録みたいな、当方の素女経抄訳などてんからモノの数ではない。

この豪華秘本を満鉄社員の一部有志相当数がグループを組んでの秘密出版を行い、無味乾燥な大陸植民地の軍国主義下の生活に、わずかでも真摯な人間性の回復に努めようというのが出版趣旨のようだった。ともあれ、私が密談を持ちかけたKだが、この人物こそ、他ならぬこの修羅八荒秘本の編集兼発行人だったという次第である。そのときのKにすれば、目明しか岡っ引みたいな満鉄の出入り記者に、さてはこの一件、早くもかぎつけられたか、と悟り魂を中外にふっとばし鼻の先まで白くなるほど仰天したのも道理千万といえ

後日談になるが、この一件の責を追いKは本庁から鳥も通わぬ北滿の果ての国策会社にとばされ、敗戦前後のソ連軍満州国進攻の際の人柱第一号となつた由。

げにおさるべきは『いろのみち』とも申せましょうか。

私の関係した素女経は、いわばこの満鉄の修羅八荒事件のそばつちりみたいな、とるに足りない副産物にすぎなかったようだ。いつかウヤムヤで消滅してしまったのも、いわば国策女優の御陵威の然らしむるところと私は今も考えおよんでいるわけである。

ともあれ、素女経の新聞広告以来、元李香蘭こと山口淑子さんのテレビ姿をみるたびに、その年増美人の容姿から、へんないろけを感じとって仕方がないのである。そしてかつての素女経の冒頭の一節の活字がいやでもくつきりと眼にうかぶのである。その文字とは、

黄帝曰夫陰陽之道交接奈何
素女曰交接之道固有形狀男以致氣女以除
病心意嬌樂氣力益壯（以下略）

橘高薫風第三句集

『肉眼』刊行記念句会

11月4日（日）午後一時・会場——大阪府中小企業文化会館



48年度路郎賞受賞作品

揚つても揚つても

雲雀に空がある

西宮市二見町三十三(但し目下神戸市東灘区森南町一三三七若草荘に保養中)

小浜 牧人

川柳塔の匂い

中島 生々庵

だけでしたが、結局、推薦の六句から主幹が路郎賞と準優秀作二篇を選ぶことになりました。

さて、そうなるのと甲乙がつけがたく、そこで、川柳塔の匂いというものに絞らざるを得なくなり、このように発表を見ることになりました。

選考委員諸氏のご熱情と作家の皆さんのご精進に心からの畏敬の意を表します。

路郎賞優秀作

揚つても揚つても雲雀に空がある

神戸市 小浜 牧人

同準優秀作第一席

落ち着かぬ心へ香を焚いてみる

倉敷市 本田 恵二朗

略歴

明治四十四年九月二七日愛媛県砥部町に生る。昭和二年同地学生グループの「川柳腔の目」に参加故前田佑健先生に学ぶ。阪神電鉄入社後昭和四年社員懇和会川柳部へ入会。麻生路郎先生、水谷勉美先生のご指導を受く。太平洋戦争激烈となり中断。昭和二十四年病氣入院中の西宮市明和病院内に勉美先生濃助の評に故田辺由布氏(不病同会員)と共に「白い山茶花」川柳会をつくる。後明和川柳会と発展し西尾榮先生のご指導を受く。昭和三年川柳雑誌「西宮支部」を若本多久恵支部長の許に創立。再入院などして現在に至る。

同第二席

片目の達磨いつも心の隅に抱く

大阪市 小出 智子

路郎賞候補作品

(到着順)

若本多久志

(各候補句発表句順は原文のまま)

有終の美を柿の実燃えており 清水 一保
真白く干して女は満ち足れり 小野 克枝
眉青き尼僧に業の煙る夜 仲どんたく
萬植えて蔓のゆくえに夢を追う 河野 君子
夢で会う亡夫はあつちむいたまま

不倫の亡母を許せるほどに女知る 宮尾あいき
有信新之助

子が母を思う日母も子を思い

工藤 甲吉
準推薦句(一)
ひと針ひと針縫うて男を追いつめる

鈴木村諷子

同 (二)

大の字に炎えて仏の去り難く 高杉 鬼遊

推薦句

落ち着かぬ心へ香を焚いてみる 本田恵二朗

☆

北川 春 巢

路郎賞

子育ての素顔ダイヤのごと光り 能登原白水

(評)「子育て」の仕事は、若いママさんには大へんなことです。近頃では、いわゆる「核家族」となり、「子育て」を指導してくれる姑さんは家におりません。また一般に子供は少なく産んで丈夫に育てるという風潮です。傍で見ていて、その努力なり、気苦労には頭が下ります。ママさんにはお化粧をする余裕がありません。それがそのままこの句になったのだと思います。

準推薦句(一)

髪振って世はバラ色の口答え 大矢 十郎

(評)「近頃の若いものは」長髪族です。

ものをいいう度びに、「髪を振ったり」、髪を掻き上げたりしています。年輩の者にはそれが気になってたまいません。それに若い人の未来はバラ色です。先の見通しのついてしまった年輩の者とは違うのです。若者のいうことが、いちいち口答えに聞えて来るのは仕方

のないことと思います。

準推薦句(二)

夏座敷魚の額を泳がせる

西 いわを

(評)通された夏座敷、すだれが吊られ、扇風機は首を振り、床の間には日本画の(俳画か何かの)魚の額がかかっています。涼味の満点です。魚の額を「泳がせる」と表現した所がこの句の生命で、いかにも川柳とします。

推薦句七句(推薦順)

(1) テレビドラマいまわの際によく涙り

傍島 静馬

(2) 都合よい事だけ聞くも長寿法

堀江 正朗

(3) 耳鳴りの他音もなし高野の夜

木山 遠二

(4) 出勤簿わたしを殺す判を捺す

高杉 鬼遊

(5) サングラス人間逃避している気

神谷凡九郎

(6) 勤続二十年変形した妻の指

柳楽 鶴丸

(7) 途中下車出来ぬ話に乗せられる

時広 一路

選 後 感

私の忘れ得ないのは、第一回目の推薦句の選をした時の暑さ苦悶とである。その時の選後感にも書いたと思うが、第一回目の折には、原稿の締切りまでに時間がなかったし、また一年分十二冊の雑誌から十句を選び、その中からまた一句を推選せよ、ということだった。はじめのことで要領が分らなかったし、私は雑誌一冊から一句ずつ推選句を選んだ、合計十二句を推選したように思う。雑誌一冊から一句ずつ選ぶということは、公平の

ようであっても、必ずしも、名句を選ぶということにはならないと思う。

その後は、推選句を選ぶつもりで毎号雑誌を見るようになったし、またその後数年経つと、四カ月毎に中間発表をして、十月号にはそれらの中から十句を選ぶことになったので、選をする側は、いくぶん楽になった。ただし、また、中間発表の他の選者の推選句を見て、一、二の名句を見落していたことに気が付き悩むこともあった。しかしこれも人間のするところだから見落しも仕方ないことである。その名句は他の選者に抜かれているのだから、諒とせられたい。

私は、他の選者に影響されることなく、自分なりに、名句を見落さぬようしたいものと懸命に努力しているのである。

☆

川村 好 郎

推 選 句

片目の遠慮いつも心の隅に抱く 小出 智子

準 推 選 句

花道が切れてわたしの足音だ 水粉 千翁

準々推選句

大の字に炎えて仏の去り難く 高杉 鬼遊

パイプルに手を乗せてより愛重し 小浜牧人

神さまが作った涙だ 流さんか

不二田一三夫

ほこりたてまい心の歩道そつと行く

本田恵二朗

抱いている秘密に女みたされる 木村弥栄子

鉄橋に夕日停せまだ遠い
現実を見る眼は片方だけに
岩田 史好
谷垣 史好
どうにでも廻る舌だよ骨がない
福井野迷路
岩田 美代

☆

正本水客

ゆっくりと廻りたい日もある地球
結婚しました自然点火です
柳葉鶴丸
お日さまにひまわり嘘のない暮し
中川晃男
二で割ったり二を掛けたり共様さ
小浜牧人
莫座に寝て融通無碍を識るのなり
西いわを
花道が切れてわたしの足音だ
水粉千翁
ワッハッハと笑いとばして死なん哉
若本多久志

準二

一直線に走って真実と並ぼうか
大峠可動
準一

目を閉じた闇そのままになるこわさ

川口弘生

路郎賞

世界地図 日本は力んでるみたい
谷垣史好
何の街にもなく淡々とした言葉で、よく日
日の現状を詠っている。戦後アニマルとも云
われながら貯えてきた力、真赤になつて歪み
に耐えているような日本地図。何時の日、真
直ぐに身を正すのか、或いはそのままに折れ
て了うのとはなからうか。

☆

菊沢小松園

一分間の柳論

求人応募者に趣味川柳と記されている人
は殆んど見当たらない。さて面接に及んで案外
川柳の要素を持っているものである。こんな
人を育成すれば川柳人として大成するのでは
ないだろうか。然しその指導には的確な川柳
眼をもつてのぞまなければならないことは言
を待たない。只多読多作主義の押売りではな
く適当なアドバイスも必要である。各地方新
聞に掲載されている句は誰もが一読して解る
句が多い。こう考えて各川柳の句を一読して

路郎賞

揚つても揚つても雲雀に空がある
小浜牧人

準一

きょう一日笑わなかった守衛

谷垣史好

準二

合鍵の温きに触れて女浴衣
紫を着るには心貧しすぎ
江城修史

結婚しました自然点火です
小出智子

出勤簿わたしを殺す判を捺す
柳葉鶴丸

真白く干して女は満ち足れり
高杉鬼遊

うたかたのごとくOL来たり去り
小野克枝

仲どんたく
水粉千翁

指もれる砂に怒りの音がない
明日生きているだてへ糞虫揺れている

藤井一二三

☆

西尾 葉

藤井春日

見ると余りにも超飛躍的な句が多い。選者も
余程苦心されたことであろう。路郎師が常に
提唱されていた平言俗語に欠けている。いく
ら変遷期到来とは云え一読興を呼ぶ句が本当
の川柳ではなからうか。再三読み返して句意
のつかめぬ句が多い。庶民文学として豆秋さ
んの句風こそ大切に学ぶべきである。人そ
れぞれの年令、性別により判断に苦しむのは
仕方ないとして、クイズめいた謎かけの句は
つつしむ、ユーモアのある句がほしい。

夏座敷魚の額を泳がせる

西いわを

貧乏に勝つとは無情の第三者

飯田悦郎

蜘蛛の糸恋にたわむるのもかかり

遠山可住

ゆっくりとこはぜ止めている迷い

谷垣史好

パイプルに手を乗せてより愛重し

岩田美代

ドル増える狸の木の葉とも知らず

小浜牧人

人世の幕七分降り八分降り

大坂形水

気違ひにもならず順応性というこわさ

若柳潮花

準推薦
偽り多き世になんの四月馬鹿
有信新之助

同
鬼の面かぶつて鬼になる強さ
香川酔々

推薦
ブーメランそんな夫にあきたらず
竹中綾女

48年度川柳塔賞受賞作品

めでた めでたで

ひとり娘をもつてかれ



島根県大原郡木次町

堀江 芳子

略 歴

昭和三十九年から島根新聞川柳教室へ正則と投句。同じ趣味で生きてゆこうと決心。明朗氏に川柳雑誌四五一号からお世話頂いて、緑之助先生、水客先生等の御指導で始めました。四十二年一月から故白柳先生や小松園先生の初歩教室で、それ以来薫風先生はじめ諸先生・先輩・師友の温かい御指導と励ましをいただいております。

大正十年十月十七日生。家族は正則と長男・二男

川柳塔賞候補作品

川柳塔賞優秀作
めでた めでたで

ひとり娘をもつてかれ

島根県 堀江 芳子

戸田 古方

川柳塔賞準優秀作第一席
鉄骨の夏雲湧かすエネルギー

松山市 谷 のぶお

同第二席

春風に唯なんとなく遠廻り

青森県 荒田 つる

雷を遠くで聞けば丸い音
色があるかぎり花は咲きつづけ
業ひとつ繕っている手術室
花祭り花の心は盗まれず
ふたりつて素的なことね老いてなお
五十過ぎ横に歩くのもおぼえ
花言葉もない雑草でなお可愛い
準川柳塔賞第二席
京都には京都の素足ばかりなり
準川柳塔賞第一席
糸切れた風が自由を見失い
川柳塔賞
春風に唯なんとなく遠廻り
今西 寿子
武元 柳子
宮崎美津子
小谷 葉子
堀江 芳子
小内山貞男
内芝としよ
武内 雅堂
嘉数千代香
荒田 つる

大坂 形水

☆

俳句留学三年、この度選句をしながら、俳句は主として美を求め、川柳は真を主とする詩だと新しい柳俳区別の仕方を発見した。詩が詩になった時、雙方を兼備する。その過程では美は知を排除しもする。知とは厳しい真実の追求である。「糸切れた風」の句はその後者である。「素足ばかり」の句は京都ならではの美しさと共に京都の複雑性の批判に成功している。賞の句の中七下五には待たれた春の喜びに憎い程溢れている。真実の深い追求と情感の極、美の表現をも兼ねている詩の中の詩として推挙する。

ばかばかうきうき野路をぶらぶらり
失対を養う草がちゃんと生え
保険断れば恩師の顔でなく
山頂に住み残照を一人じめ
内藤まする
伊藤 一郎
堀江 芳子
岸本豊平次

花冷えに足袋の白さが痛いほど 柳原 秀子
病窓の雲ちになりははになり 福島 城山
紙人形創る夜男の匂い消す ぶきあげ虎城

準優秀作第二席

先生の愚痴とも遊ぶ僻地の子 安田かつみ

準優秀作第一席

魔杭のざくろ夕陽に熟れ急ぐ 小谷 葉子

川柳塔賞

鉄骨の夏雲湧かすエネルギー 谷 のぶお

☆

橘 高 薫 風

推薦句

めてためてでひとり娘をもってかれ

堀江 芳子

候補句

新世界香車が一つ落ちていた 堀口 欣一

さし出して見せる青春持っていず 高杉 力

失対を養う草がちゃんと生え 伊藤 一郎

冬思想で重なり合ってる枯葉 小谷 葉子

着飾った女がやばったい青葉 三宅 不朽

美しく老いたる人の舞姿 日高 文市

片すみで見てる此の世がこわくなり

檉村ふみよ

結婚も離婚も同じ判を押し 熊野 溪水

旅人へ旅人が道問う嵯峨野 麻野 幽玄

(評)堀江芳子さんの句は、句意明瞭、一

人娘を嫁がせた親の複雑な心理を詠んだもの

である。親戚縁者、近隣知己が集って唄う祝

婚歌の賑やかさ。めでたくうれしい現実の中

に、心を吹き抜けるうつろな淋しさは如何と

一分間の柳論

最近新聞や雑誌に俳句とも川柳ともつかぬ作品が選ばれることがある。しかも天地人にこうした論議を巻き起こす作品を選ぶことは問題ではなからうか。

専門誌であれば、問題提起、ないしは実験として意義もあるが、大衆相手の新聞、雑誌では絶対にさけるべきだと思う。

専門家も読めばズブの素人も目を通すこうした大衆紙(誌)の場合やはり誰が読んでもこれが川柳だと納得する作品を佳作以上には

選ぶべきである。

春日師は「柳人が作れば川柳、俳人が作れば俳句」と教えられていたが、私のような初心者には「川柳は川柳らしく、俳句は俳句らしく」一線を画してゆきたいと思う。

選者は絶対的君主である。信んずるところによって選をすることはもちろんであるが、少くとも大衆を相手にする場合、あるいは初心者をも対象とするときは「川柳は川柳らしく」あるべきであろう。

竹内翁童

もし難く、二十数年愛育したわが分身を掠奪されるのだとも思えてくるのである。この句の表現上の優れた点は、良く知られた民謡の文句取りから、婚礼の華やかさを様々に想像させたことと、殊に、語尾を「もってかれ」と荒々しく表現したところである。深い人情の内容に俟って優れた表現はこの句を価値の高いものにした。次の堀口欣一の句は、大阪新世界限の一点景であるが、作者の眼の鋭さは尋常ではないと云える。あえて坂田三吉を生んだ土地柄と結びつける理由もないが新世界は、金・銀の世界ではなく、正しく香車にふさわしい渡世の場なのである。三番目の高杉方氏の句は、学校は進学のための機関の如く化し、家庭は親との交流も曖昧で、若者の青白い青春像は、教育の大改革を必要としているように思われる時、青年の立場か

ら、「さし出して見せる青春」と、一気に訴える句の息ともいうべき姿は、読者に強い緊迫感をもたらす。それは一種の立派な風格に通ずるものである。

私は、この三句を強く推す。昨年度の受賞者が島根県であったから、今年もそれでは困るというような斟酌は無用のことであると、余計なことながら附記して置く。審査の場に出られない事情から、詳細に推薦の辞を記した次第である。

路郎賞受賞

小浜牧人

思いがけず路郎賞の受賞が私の句に決定と一三夫さんからお知らせを受け、その瞬間私

は余りにも意外性に全く他人事のように聞いている。然し句を示されて初めてそれが実感となつてきて胸の熱くなるのを覚えた。

この句に陽の目を見せて下さった小松蘭先生に厚く御礼を申し上げたい。同時に路郎賞の句となれば川柳塔社の句として注目を浴び批判も受けるであろう。果してその名に恥じぬ句として批判に耐え得るかとの恐れをしきりに感じている。

昨年は夫・今年は私

堀江芳子

一三夫先生の速達で驚きました。「川柳塔賞」を戴くなんて夢のようでした。

新春早々に嫁がせる娘の喜びと佻しさが交錯して何とも言えない心のままを句にしただけでした。

「おめでとう」を連発する正朗に今夜はゆっくり祝盃を重ねてもらいましたが、とても嬉しくて涙がこぼれました。

ありがとうございます。諸先生はじめ皆様の御指導と温かい御支援のおかげでございます。

審査風景雑感

不二田一三夫

二賞の審査はどうしてするのか——このよ

うなおたずねがよくある。

「選考委員の方々は大変ですよ」ぐらいてお茶をにごしているが、実際にシンドイ仕事である。前年の十月号から九月号までの十二ヶ月間ともなると、九月号の校正が出るのがその前月の二十日ごろ。それを諸氏にゲラ刷りを速達で送るのが（同人吟六氏、水煙抄三氏）校正を二度くりかえし九部こしらえるのはばくもシンドイ。なかにはいつも句が脱落しているで、それを全部一枚一枚、何句か書かねばならない。

こんどの場合も九月号のゲラ刷りが最終月なので、十日間ほどで本社へ送っていたいたわけである。——九月号が最終月というので力作を出されるのか、拾われる句は九月号が圧倒的に多いのは第一回から変りなく、選考委員諸氏も目新しく感じ、九月号の句を多くとられる傾向が強いようである。

さて本年度は、主幹が「川柳塔の匂い」という言葉をはじめて口にされた。川柳塔カラーの句ということであろうか。

各選考委員が、路郎賞の場合は六氏だから、六句の推薦句がまず有力候補となるわけである。しかし推薦句が一句だけでは弱いようだ。恵二朗氏や智子氏は、推薦句のほかにもう一句ずつ選ばれていたもので、どちらかが準優秀作第二席になる可能性が強かったように見受けられた。と

いうのは、史好氏が推薦句のほかに準優秀作第一席とまだほかに二句、都合四句だったので路郎賞の最有力とばかりは思っていた。（選考委員諸氏には推薦句と準一と準二、ほかに七句の候補句をお願いしておいた）

だが、最終選は、推薦句一句が対象になったため、発表のとおり結果になったわけである。鬼遊氏も惜しかった。準二が二句とほかに二句、これも四句であり、とくに、同一句に二人ずつの選考委員が推していただけに実に惜しかった。

来年度から八月号を最終月にするようになった。そうなればゲラ刷りを速達で送らなくてもよいし、選考委員諸氏もそうバタバタやらなくてもいいわけである。したがって来年度にかぎり十月号から八月号までとなる。

ショッピング・ゾーン

梅田
一番地

楽しいショッピングと
のびのびと
歩くまで
いこいこ
百貨店



阪神
大塚梅田・水端定休
電話 06-345-1201(代)

水煙抄

北川春巢選

東京都 山根白星

地の果ての餓死へ讃美のカメラ・アイ

裏面史に見る運命の紙一重

政治家に一矢むくいる腹話術

父なし子生みさかしらな理由づけ

ネグリジエのおっとり刀見た出前

尼崎市 中谷利美

押売りと五分に太刀打ち出来る妻

考課表どうであろうとマイペース

近所から母に暦のいる話

カムバックしたさ自殺も真似る歌手

大和郡山市 森田カズエ

触ったら火がつきそうな毛の女

夏バテの脚と知らずに猫じやれる

失対の人等憩えば蟬しぐれ

バーチャンと云わせて欲しい電話する

鳥取市 両川洋々

飲めぬ酒飲んでる訳を子に聞かれ

使うプランと貯めるプランで夫婦もめ

電力不足に乗じて火電建てたがり

正直に話せば話したで妬み

三重県 川上富子

幸わせなのに夫婦茶碗が欠けていた

夏祭り行ったり来たりして楽し

赤い屋根一つ同化せぬ過疎地

札束を並べて土地のない農夫

竹原市 三宅不朽

墨をするごとき悔あり原爆忌

墓地からの見晴し地価のことにふれ

干天へなにはなくとも湯が溢れ

和歌山市 秋月宏方

一と通り薬も置いてマイホーム

オール五取った子だった平社員
民宿で心落ちつく紙障子

和歌山市 樫村 ふみよ

いい事は信じることにする八卦
ママとなるためにがまんもする氷
髪型を変えたら鏡よそよそし

大阪市 堀口 欣一

総務課に水洗がつまりましたと来
心電図なども知ってるおばあちゃん
京大阪背負呉服屋生きている

米子市 石坂 新雪

玉ネギときょうご五人がつめて乗り
ラストまで紅一点の所作へ向け
脳波だけととのえてもろた修了書

松山市 谷 のぶお

百グラムを実感で知る妻の留守
天罰のとどこかぬとこでばろ儲け
哀しさを犬と一緒に抱く女

茨木市 吉川 米子

お茶代はわりかん雲囲気は丸どり
踊る方の阿呆になって波に乗り
多情多恨みなはき出して阿波おどり

竹原市 岩本 笑子

酔うている日には名前をチャン付けで
言葉にもいろんな温度がありました
なんとなく素直になれず茶碗割る

大阪市 阪上 十止庵

転職をやめよと白髪光ってる
うしろから見れば仏像寂しかり
指切りの別れ不倫の意識なし

和歌山市 吉野 富子

大卒が重荷になった娘の歩み
冥土まで負けん気 持って行くらしい
八点の妻で不満の無い暮らし

河内長野市 井上 喜醇

赤電話不満残した俣切れる
宗教が妻の道楽逆らわず
恥しさ忘れた妻の風呂あがり

島根県 堀江 芳子

郷愁を広げひろげて盆踊り
即答を笑いで埋めて考える
月光を着て立話まだ続き

和歌山市 垂井 千寿子

姑を亡くし

土用照り姑の日傘を櫃に入れ
帯結ぶ時姑呼べぬもどかしさ

形身分け簞笥哀しい音で鳴る

鳥取県 大坪 天涯

生活のリズムが女の目で崩れ
空想の虚しさ非情な明日が待ち
精一杯生きて古傷など忘れ

樫原市 西本 保夫

汗かかぬ程度にしておく平社員

割り切った人生観の平社員

出るところへ出れば責任の無い平社員

守口市 岸本 豊平次

アルバイトだけは張り切る夏休み

どん底に落ちて眼の霞取れ

もう医者を変えてみる程余力なし

岡山県 谷川 渥子

疑わずゆるる振子の中にいる

鏡ふく所詮ピエロの貌なのに

想うこと指にはずませレース編む

鳥取県 林 露杖

無視されたおしやべりボカンとして終り

ふと触れた肩の丸味に気押される

暑さに負けて二日緋く万葉集

八戸市 安田 勝己

歯車にはじき出された自己嫌悪

やどかりの殻に合せたエゴイズム

ジャン好きへ供養に囲む通夜の卓

新潟県 高野 不二

ズボンでもシャツでも男とは見えず

金貯めて土地買う庶民のアンケート

若者の感覚テレビに出てのろけ

羽咋市 三宅 ろ亭

札幌は腹巻きの中仔牛撫で

値上げした新聞二三日篤と読み

Uターンの男しきりにネオン恋い

厚木市 高野 芸太郎

葡萄番無言の欠伸星仰ぐ

掃除機をこうるさく聞く下宿住いのヤング

千羽鶴ベッドからはみだして退院日

泉佐野市 大工 静子

モンブランにて(一句)

牧草はフランス平野敷きつめる

再婚の人

枯れかけた余生小さく咲いて見る

空虚感深夜放送と終りなり

岡山県 永守 宗義

世をすねて見てもチンピラたかが知れ

養老院また肩書がすて切れず

なぐさめる心に邪心ひそませる

豊中市 安藤 寿美子

大文字もうしまいやと飲み直し

土用丑ナンセンスよと銭がない

ひよっとこの仮面をつけて詩人なる

大阪市 木村 濁水

魚異変夏祭りにも異常あり

ポケットにきのうの喪章千々照り

熱帯魚よくぞ男に生まれけり

大阪市 花田 繁子

柳友は名を呼び合って若返り

努力より天候次第の百姓さん

会う度に笑顔もらって何上げよう

大阪市 小谷 葉子

真向うから吹く風なら受けて立つ

すぐ燃える女で涙も涸れつくす

ゴメンナサイ三分通話の片笑くぼ

仙台市 川村 映輝

坐食して政治の貧困さを怒り

ケチな奴他人のケチが気にかかり

松江市 内藤 喜夫

父と子の対話をつくる生ビール

生活の乱れを見せる肌の色

松原市 守屋 万竿

晴耕は三坪の庭を掘りかえし

イエスマン会社でるなり苦り切り

羽曳野市 麻野 幽立

引金に指掛けたまま説く平和

剃刀の切れ味だけはよい炎暑

東大阪市 落合 思月

恍惚へ孫もからんで来なくなり

嬉しい日亡き母偲ぶ年になり

青森県 荒田 つる

一周忌短所はみんな忘れられ

しあわせが逃げた時から強くなり

高槻市 山田 スミ子

猫の残飯朝の雀をさえずらせ

相談が結局破談へ持ち込まれ

和歌山県 ふきあげ 虎城

秘めていた夢をくだいてくれた妻

強いこと言うてられない罵におち

和歌山市 垂井 一睡

茶碗わる音ああ母はもう還られず

中陰を往き来にせわし初盆会

和歌山市 仲原 己恭

感受性麻痺し始めて死ぬキヤリア

錠錆びて心の小筐ときめかず

寝屋川市 福富 隆子

汗だくのまだまだ若いかなと思ひ

管理職やめても家でやかましい

大阪市 横地 正彰

山削る山の怒りはいつ受ける

こんな筈でなかった老醜今日も暮れ

岸和田市 池田 香珠夫

女ひとり生き抜く三味ののん気ぶし

泳がせて一網打尽へデカの読み

鳥取市 大塚 豊生

振り向いた後の方が佳い景色

逆境の過去よみがえる受賞式

米子市 増田 竹馬

予防線とは気付かせぬ身のこなし

両替のタバコ笑顔でおつりくれ

大阪市 新川 貞裕

稼ぐより実入りの多いねばり勝ち

菓子にも使うロッカーの数ふやし

弘前市 小山内 貞男

役人の構図に揺れる農あわれ

そろばんを忘れた野良に雲流れ

新潟県 市川 一峯

物価高祖板やけに聞こえて来

金の価値孫心よく使いする

新潟県 栗和田 清子

一病を大事にという齢になり

ユックリズムやはり隣が気になって

名古屋市 大林 曲ん手

婿方の父は済まないように酔い

まだ先が見たい老眼鏡を拭く

守口市 野呂 右近

吸い付かぬ磁石にも似て空しい日

幸先もよし信号機青々々

高槻市 竹内 花代子

機上にて(一句)

雲割れてメダカのような船がゆく

うぐいすの声団体の足を止め

須賀川市 平栗 金太郎

カナカナにせき立てられてデパートに出

旅馴れてタオルで判る宿の良さ

高知市 竹崎 寛

はい小言きかねばならぬ職も兼ね
謙譲の美德はよせという小言

寝屋川市 江口 度

スモッグをなじれば停電とおどかさ

夏バテのボールがはねる外野席

倉敷市 津田 耕水

神様の袖も乾きる暑さ

風が出て風鈴声をかけて呉れ

島根県 安達 潮音

梅雨あけは昨日でしたという暑さ

来る孫に老を見せじと罷をそる

竹原市 古江 雅鳳

野仏がひと風呂浴びた通り雨

貧乏でよし裸で夏が過ぎ

青森県 田沢 つとむ

倒産を知らず看板雨に耐え

法要を済ませ財産争いし

貝塚市 行天 千代

偏屈が只の仕事はことわらず

若後家を通して一分の隙もない

今治市 大本 バット

百円の手相良縁保証する

代替りして値引せぬ店になり

今治市 伊藤 一郎

当分は我慢している嫁の味

海水着ちゃんと女になっている

今治市 真山 国彦

膳立ての通りお偉い方動き

私服着る気がサングラス掛けさせる

今治市 今井 松花

中三の水着脇毛はまだ剃らず

汚れても波の形は瀬戸の海

今治市 古野 伶人

よう出来ている標語やが守られず

海へ来てまで麻雀で夜を明かし

大阪市 鈴木 生仏

親の恩忘れて恋の字を習い

九段坂貴方の孫を見せに来た

大阪市 吉野 志津

商談によい場ともなるひかり号

今治市 渡辺 伊志津

そういえば鳥も暗かぬ公害禍

備前市 武内 雅堂

苦勞して育てる寡婦の日焼け顔

諺は昔の人の智慧袋

大阪市 大 国 たかし

写経して今日の仕事も済む日記

新見市 吉 田 落 猿

瀬戸晩夏女一人の泪解け

竹原市 岩 本 文 晴

玉の汗ふき出る元気笑う今日

大阪市 浜 西 駒 子

不快指数蟬は愉快にピッチ上げ

大阪市 平 井 露 芳

こんな時また船頭の多すぎて

島根県 谷 岡 芳 枝

大木に根なしカズラのまといつき

島根県 岩 田 三 和

夏の夜を恋のときめき花火もえ

島根県 東 原 福 子

恍惚のきざしも老妻苦にもせず

鳥取県 福 田 陽 山

八月十五日の思い出

和歌山市 津 田 与 史

デマ放送がデマでなかった敗戦日

豊橋市 鎮 浪 翠 月

生まれつきだとは思えぬ不器用さ

堺市 栗 本 藤 持

休耕地まだ草生やし食い足らず

青森県 波 ただお

海岸はよしみな肩書きをぬいで来る

寝屋川市 井 上 武 松

先祖代々此の石塔に礼拝

大洲市 堀 内 暁 風

はめられてうれしい団扇で叩く真似

今治市 原 田 輝 親

内孫外孫巡回保母で忙しい

岡山県 高 山 みどり

ばあちやまも負けてはおれずメヌエツト

神戸市 佐々木 静 泉

下呂温泉にて

ここに来てまで貝がら節を歌わされ

大阪市 須 浦 つ ね

高血圧生野菜ばかり食べて生き

大阪市 広 畑 賛 平

寺町が賑やかになる盂蘭盆会

大阪市 村 島 秀 村

傘なしにぬれて嬉しい今日の雨

母と川柳と

垂井葵水

カナダかう帰ったばかりのU君が奥さんの耳うちで、旅装のまま馳けつけてくれた。肩書は和歌山市長だが、私には学生以来からの親友である。「オレの留守中に……」と絶句した。そんな彼を秘書が引き立てるように帰るのを門まで見送って、玄關傍の弔間をうける喪主の位置へ戻ったとき「おい、大変やったナ」と手を握られた。「アッ」私は思わず声をあげた。薫風さんだ。そして後ろに新之助岳人両君の顔が続いていた。(不二田氏は急に仕事のため不参加)

大阪から、然ももう通夜客もあらかた減った時間に……。紋切り型の挨拶は抜きだった。手を握り合って太茂津さんに案内されて母の前へ進む三君の背中を見ながら溢れてくる涙を押えられなかった。生来親不幸だったためか、母の臨終にさえ涙が出なかったのに……

七月十五日朝、NHKのテレビ「川柳の町」弓削を紹介した。出勤時間を延ばして母と妻と私と三人で楽しく終りまで見た。「お姑さんも始めたら？」と千寿子。今まで「どうしても俳句になつてしまふ」と常に言っていた母も、妙に興味を憶えたらしい。「十八日のうちの句会までにキッとこしらえておく」ことを約束して私は家を出た。それが母との永遠の別れだった。約六時間後、急を聞

いてから母の意識が戻らなかったのだ。そして息を引き取ったのは私の誕生日——二十二日のだ。

栗先生は「たとえ一週間足らずでも看病出来たのはうらやましい。ボクの方はアツケなかつたよ」と慰めて下さった。生々庵主幹から早早電話を戴いたし、川村好郎先生が主幹の弔吟を携えて川柳塔社代表として焼香され、ふあうすと社の増井不二也先生も遠縁の一員として連なつて下さった。その上柳界の諸先輩や仲間たちが炎天をおして見えられ、或は弔吟を手向けて下さった。

最近「そこひ」の手術以来少し不自由になり、血圧の関係もあって長生することに弱気になつてはいたが、突然の死とその上に連夜だ、初盆だ、仕上げだと天界での忙しい中で母も、柳友先輩から戴いた数多い弔句に埋もれて感謝しながら、在世中に一句も出来なかった「川柳」をひねつてゐることでしょう。ありがとうございました。

☆

▼尼緑之助句碑記念誌が「尼緑之助句碑建立委員会」から発行。大社町長、出雲市長につづいて麻生霞乃先生のメッセージ(西尾葉氏代読)が光る。

▼本多柳志氏(大阪市)の住居番号変更——城東区今福東ノ三四(九号—三〇九)

▼川柳ジャーナル別冊・細田洋二作品集が千五六九高槻市竹の内町三二八ノ二第七東和苑一〇一、河野春三方から発行。千共三百円

▼汐風川柳社は本誌三百号を記念して、句集

「汐風」発行企画広く句を募集。十句(白選)参加費八百円(一冊)千五百円(二冊)郵便振替口座・広島二八九七〇番。装釘B6五〇〇頁程度美装本、製本は新デザイン。発行予定は本年十二月。(締切は九月三十日なので速刻ご出句のほどを)宛先——今治市共栄町二ノ二、汐風川柳社句集係。

☆

豊中文化祭協賛

第十六回豊中市民川柳大会

日時 昭和四十八年十月二十八日(日)
午後一時

場所 阪急沿線堂池(豊中市堂池町三九一二〇) 主催 豊中川柳会
兼題 豊中中央公民館

兼題
「開 発」 加賀 破竹 選
「オートメ」 西村 芳川 選
「あてはずれ」 若本 多志 選
「売り惜しみ」 榎本 聡夢 選
「陳 情」 橋高 薫風 選
「き ら い」 村上 孝一 選
「悪 夢」 村上 孝一 選
席題 二題 当日発表
兼席題秀句に豊中市より呈賞
厚生年金法改正 記念課題「老人」
入選者全員に記念品進呈
（但当日出席者に限る）
会費 二〇〇円—投句 郵券一〇〇円

路郎賞
川柳塔賞

候補作品中間発表

自 四八年六月号
至 四八年九月号

路郎賞候補作品

若本多久志

ひと針ひと針縫うて男を追いつめる

灰色に褪せて女の業果てる
純白の汚れることにある悟り
額縁の黒リボン解く手の重み
子が母を思う日母も子を思い
不倫の亡母を許せるほどに女知る

有信新之助
仲どんたく

眉青き尼僧に業の煙る夜
落ち着かぬ心へ香を焚いてみる
さん付けで娘を呼ぶ母に暗い過去
労わりの言葉待たぬ耳でよし
子の瞳には母に女の性はない
紫蘇の香のただよう厨妻の幸

北川春巢

衣食足り竹べらで掘る遺跡
勤続二十年変形した妻の指
テレビドラマいまわの際によく喋り
白井三林坊
柳楽 鶴丸

耳鳴りの他音もなし高野の夜
コマーシャルどおり残りの歯を磨く
傍島 静馬
木山 遠二

髪振って世はバラ色の口答え
子育ての素顔タイヤのごと光り
変身のささし娘の眉細くなる
三井 酔夢

くすりにでもするよう麦を作ったり
蚊帳くぐる思い出いつも母がいる
越智 一水
宮尾あいき

川村好郎

二で割ったり二を掛けたりの共稼ぎ

抱いている秘密に女みたされる
温かい言葉探している別れ
山を抱く雲ふんわりと母の膝
小浜 牧人
木村弥栄子
小野 克枝
板尾 岳人
福井野迷路
江城 修史

どうにでも廻る舌だよ母がない
直角に曲る人生媚知らず

正本水客

花道が切れてわたしの足音だ
現実を見る眼は片方だけにする
鉄橋に夕日倅せまだ遠い
羽振りよい方が呼びとめる久し振り
遠距離の父の電話のやさしさよ
水粉 千翁
岩田 美代
谷垣 史好
岩井本蔭樺
河股 緑水

菜の花は食べるに惜しい京の膳
一直線に走って真実と並ぼうか
花道が切れてわたしの足音だ
濃い緑一色となり塔沈む
帰る家あるから楽し旅の宿
軽石の主張浮いたまま放つとかれ
三井 酔夢
大峠 可動
水粉 千翁
西 いわを
増田 次章
本田恵二郎

目を閉じた闇そのままだなるこわさ
老梅のちよばちよばちよばと咲いてよし
お日さまにひまわり嘘のない暮し
ステッキが帽子部にある百貨店
川口 弘生
景山 綾美
中川 晃男
土井 浩輔

二で割つたり二を掛けたりの共稼ぎ
淋しうて街へ出たけど月一つ
小浜 牧人
小川 静観堂

菊沢小松園

ああ戦友いくさを知らぬのが歌い
うたかたのごとくOL来たり去り

指もれる砂に怒りの音がない
 炎えること忘れて夫婦茶漬食う
 誰が売るものと土にしがみつ
 譲歩するころへ平和について来る
 アドバルンのんびり風に逆らわず
 腑分け見たいに指かけてチャック

仲どんだ
 米粉 千翁
 高杉 鬼童丸
 村上虹童
 川崎秋女
 河股緑水

あす生きるてだてへ糞虫揺れている

西尾 栞

偽り多き世になんの四月馬鹿
 ドル増える狸の木の葉とも知らず
 ネオンに強く紫外線に弱い肌
 人生の幕七分降り八分降り
 ジャングレにもけもの通る道があり

有信新之助
 大阪府水
 宮尾あいき
 若柳 潮花

すまんなあと妻へ素直に云えた幸
柳葉鶴久
楽書きの数字も今すぐ欲しい額
大矢 十郎
鬼の面かぶって鬼になる強さ
香川 酔々
正しさの通らぬ世なり石となる
高杉 鬼遊
愛の目を云えば褪せる日のこわさ
川口弘生

母なる大地なんぼでも高うなり 玉置 重人
 気違いにもならず 順応性というこわさ 神谷しんり

川柳塔賞候補作品

戸田古方

安物の金魚ながめて飽きもせず 安藤寿美子
お漬物やけに冷えてる水蔵庫 森田カズエ
安産を農事放送告げている 田沢つとむ
旅に出る妻の荷物を提げている 大林曲ん手
春風に唯なんとなく遠廻り 荒田 つる
花祭花の心は盗まれず 小谷 葉子
ふたりって素的なことね老いてな 小工 吉子

五十過ぎ横に歩くのもおぼえ
花言葉もない雑草でなお可愛い
噴水のささやき春着はしくなり
わりかんのお好み焼を吹いて食う

小山内貞男
内芝としよ
坂東 若芽
船越洋之

大坂形水

燕返し空気に壁のあるごとし
お茶のんでお手を握っただけのこと
三宅 不朽

旅に出る妻の荷物を掲げてみる
途中下車真面目な友に見送られ
大林曲ん手
井上 喜醉
猜疑心金魚にジツと見つめられ
佐久間文明
保険断れば恩師の顔でなく
堀江 芳子
紙人形創る夜男の匂い消す
ふきあげ虎城
先生の愚痴とも遊ぶ僻地の子
安田かつみ
廃坑のざくろ夕陽に熟れ急ぐ
小谷 葉子

鉄骨の夏雲湧かすエネルギー 谷のぶお

橘
高
薰
風

母となる立場となつて母を恋い 柳原 秀子
生涯にナイスショットは出ずじまい 新川 直吉

部屋中が葉巻となつてマイホーム
靴下で臍までかくしミニを穿く
離婚してから不幸は口にせず
すぐ怒る父は悲しき元兵士
三Cを競うたとなり越してゆき
着飾った女がやほつたい青葉
花菖蒲おんな盛りを見る如し
こんな事して居て死ぬる阿呆らしさ

伊藤 一郎

小谷葉子
土井 浩輔
中谷 利美
森田カズエ
川上 富子
三宅 不朽
堀江 芳子

何もきかないイヤリングが光る
阪上十止庵



PH-52

高級洋菓子・レストラン

本店 洋菓子部TEL (33) 9974
レストランTEL (21) 2334

川柳 中山道六十九次 (8) 富士野鞍馬

38 上松まつ

福島より二里半(九・八キロ) 駅中南北五町相對して巷をなす、其余山間に散在して住居す。此駅都會の地にして商人多し、繁昌の地なり。駅の北に新茶屋というあり、わずか三家あり、蕨餅をひさぎて名物とす。

上松より福島の間は棧橋(かけはし)の旧跡あり、むかしは上の山に街道ありて棧道には鎖にてつなぎわたせし也。後世今の如く石を積て橋も短く峻しきことなし。と賛書した挿絵がある。

かけはしや命をからむ藁かつら はせをの句碑が建てられてある。

木曾殿と翁(おきな)をからむ藁かつら (ケイニ六)

棧道もある日本の食(しょく)の国 菅子(二〇二八)

中国の蜀棧道にかけた洒落、

食の国は信濃の大食

駅から南二キロに、木曾街道第一の勝景といわれる寢覚の床がある。木曾川の急湍はここで大岩奇石に遮られ淵となつて、対岸の樹

木を背景としてまことに壯観である。河中に「浦島太郎釣船岩」と伝説される幅一八m、長さ七二mほどの大きな岩がある。これをこの上の臨川寺から見下ろすとよく見える。それが図会の挿絵に描かれてある。

ほととぎす寢覚の里の運桜 歌枕寢覚の床も見えて通り (ケイニ五)

龜及び浦島日本記へも乗り (新樽六)

街道の寢覚の立場に、昔から名高い二軒の蕎麦屋があつて、中山道の名物であつた。今にその店は存在してゐる。

川留にこりて寢覚の蕎麦を食ひ 川島(二五五)

寢覚のそばを夢で食ふ旅つかれ 小蝶(八四一五)

蕎麦俵つけて寢覚の戻り牛 (ケイニ三)

蕎麦殻を詰めて寢覚の貨蒲団 松魚(四二二)

寢覚の里の蚊いふしにそばの殻 鉄扇(七二一〇)

蕎麦の殻寢覚の里の蚊遣草 清原(九八二四)

39 須原

上松より三里九町(一二・八キロ) 東山道駅次なり。東西四町余相對して巷をなす。土産絲綿、此辺の諸村蚕を養ふ事多し。西口に定勝禪寺あり、臨濟宗京師妙心寺に属す。

上松から須原の間に、木曾八景の一「小野滝」がある。図会に

「此滝は山間より巖をつたひ、只布をさらせる如く落ちる。傍に石像の不動尊まします。細川玄旨の老の木曾越といふ紀行に、木曾路の小野滝といふは、布引・箕面などにもおさおさをとりやはする。これ程の物の此国の歌枕にはいかにもらしけるぞやと書れしなり。真の雲飛て素練をたれ、石に噴びて明珠を散すとは、此所の事なるべし」

とあり、直下木曾川に落ち、幅一・八m高さ三〇m、中央線の車窓からも見える。挿絵にも描かれてる。

名にもめで景にもはれる小野の滝 (柳の糸口)

40 野尻

須原から一里三十町（七・二キロ）此賑いにしへは野路里と書す。駅中東西五町余、相對して巷をなす、其山間に散在す。

須原からの道に、今井四郎兼平の城址がある。挿絵にも描かれている。

兼平は、義仲四天王の一人、巴の兄であった。義仲の旗上げから最後までついていて、粟津が原で義仲の最後を見とどけ、一騎で敵中へ切り入り「今は誰をかばはむとて軍をばすべき、これ見よ東国の殿ばら、日本一の剛の者の自害する手本よ」とて、太刀のきつさきを口に含み、馬より逆さまに飛び落ち、貫かつてぞ失せにける。と「平家物語」にある。謡曲にもなっている。

かね平もともに深みへつつばまり

（宝八板2）

兼平を見さんなどと巴いひ

（安四信7）

鏡台に

高鷲亜鈍

鏡台に用がないから蹴つまずき

女房も息子も自分のものだけ片付ける

場所も与えず退いてくれとは

妾が兄でも兼平はきつい事
死水を取ったは今井一人也
馬からりっぱに落ちたはかね平
（天元義1）
（五10）
（二三7）

兼平の手本はめつたならはれず

（拾五21）

兼平はりっぱに落馬した男

（震朝三五8）

兼平の首は持よい穴があり

（宝十三智4）
（松慶九三21）

この時兼平は三十三才、義仲三十一才、巴は二十八才であった。

41 三富野

野尻から二里半（九・八キロ）駅中南北二町余り相對して巷をなす。木曾路はみな山中なり。名にしおふ深山幽谷にて、祖（そば）つたひに行くかけ路多し。就中野尻より三富野の間、はなはだ危き道なり。此間右は数十間、深き木曾川に、路の狭き所は木を伐りわ

たして並べ、藤かづらにてからめ、街道の狭きを補ふ。左はみな山なり。屏風を立たる如にして、其中より大巖さし出て路を遮る。此間に棧道多し。いづれも川の上にかけたる橋にはあらざ、組道の絶えたる所にかけたる橋なり。他国にはかやうなるかはし稀なり。山の尾崎を廻りて谷口へ入、また先の山の尾崎をまはる所多し。其谷道に横はりて溪川の流れ、木曾川に落合所多し。これにかくる橋なればあやうき事甚し。其向ひに垣友といふ所もあり、其所より溪川一流來りて双方の間に大岩あり、美景なり。と國會に書かれ、その危険な図が挿絵にある。

雲もなを下に立けるかけはしの

はるかに高き木曾の山みち

（瀬頼具）

駅の西に三富野邸（やしき）という小山があり、義仲の子孫が居た所という。

酒のぐち息子の胫をかじるとは

女房の若き氣になる六十路

ばろくそに云うて子供等寄つてこず

世帯主は息子飲むのに遠慮する

息子から夫婦喧嘩をたしなめる

内氣弱氣奥手蘭痒し父と裏腹

爺の掌へグリコをのせる三才児

寿命つないで孫の生長を待つ

洒さげてめくらの叔父へ見舞に來

慕いくるうれしい奴よアウトロー

親戚にめくらの出入禁じられ

世界觀の相違息子なんでも捨てたがる

臭いと云うそれなら俺が食うてやる

恐がりにインタホーンをつけてやる

じゅくじゅくと晩のうらの淫靡なる

夜が遠のいて夫婦の口喧嘩

核家族係も出てこい電話口

胃が洗われて綺麗さっぱり

がばがばがばどうやら吐血したらしく

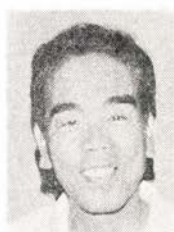
吐血して驚いたのは周囲

川柳と松江

川柳塔まつえ

吉岡 遯 児 小林 孤 呂 二
津川 紫 吻 恒 松 町 紅
中川 晃 男 舟 木 与 根 一
岡崎 祥 月 柳 楽 鶴 丸

(発声順)



通児——この

度、はからずも川柳塔で島根特集号を企画されるに当たって、特に川柳塔まつえで座談会をとの依頼があり、お集り願った次

第。そこで何を語り、何をお披露しようかと考えた結果、主題の川柳と松江ということとし、語り合ってみたいと存じます。

古来、松江に足跡を残した文人墨客は枚挙にいとまないと聞いていますが、紫吻さん、その辺りから話のいとぐちを出していただだけませんか。

紫吻——私の知るところでは、文人では一寸あげても五十指を越えると思うが、何と言っても世界的な人はラフカデオ、ハーンでしょう。松江藩士の娘、節子を妻に迎え、名も小泉八雲と名乗り松江で帰化人の草分けと

して松江を世界に紹介したことは余りにも有名ですね。また文学界では里見弴と志賀直哉が遇然、同じ舟で宍道湖で糸を垂れるといった景があったことも、何年か経ってお互いの知るところとなったという面白い挿話が残されているほど数多くの文人の来訪があった訳です。

晃男——私が知る人で野口雨情さんがありますが、雨情さんは極度の雷嫌いであったと聞いていますが、雨情さんは雷が鳴る前には必ず腹痛が起り一たん鳴り出すと大変お騒ぎになられたそうです。

ある時松江郊外にある大社造りの国宝で有名な神魂（かもす）神社へ参詣されたとき、丁度前述の状態が露呈されたと聞いています。雨情さんが宿に残された松江を讃える詩にこんなのがあります。「松江よいとこ住みよいところ、宿の岸まで舟が着く」特に水郷松江の情緒がくまなく出ていて松江人への何よりの置き土産であった訳です。

通児——ほかに藤村、桂月、等々の松江に残した讃詞も相当ある訳ですが、こと川柳人となるとどうでしょう。



祥月——やはり

川柳が出てこんなとにや、ここへ何をしに来たのか意味がないし、二言三言語るとしましうか。

先ず何と云っても大御所、路郎先生を語りたいね。

かつて勝谷山川晃君が健在のころ、同君の住居が大橋詰の宿屋であった故もあって、路郎先生は数回同君宅を訪ね、大橋も宍道湖も一望の部屋がお気に入りであったし、僕も両三度、膝つき合わせ川柳を語ったものであったが、その折々に詠まれたのが次の二句で、いまでもこの句に接すると当時が懐しくよみが

えってくるね。

和多見通い明るく聞いただけのこと

灯を消せば松江大橋月のもの
路郎

紫叻——古いところで、これは必ずしも
路郎

松江ではないが、井上剣花坊の残した句もい
ね。

我がものと他国の山を出雲富士
安来節阿国を生んだ故郷の歌

嫁島へ向いて散らした歯みがき粉
孤呂二



——僕がいま覚えてる中に次のよ
うなのがある。何
れを鑑賞してもし
みじみ松江の味わ
いがでていて、つ
いとい俺の町はい
いなあと微笑みが
湧いてくるよ。自
分の句で恐縮なが

ら提灯持ちとして、

みずうみに夕陽が沈み祭の灯

一という字がはじまりの嫁ヶ島

大橋を見上げ喫ってる四つ手綱

袖師から呼べ来そうな嫁ヶ島

大橋の入陽年甲斐もない旅愁

町紅——いままで聞いていると殆どが

穴道湖の句だが、それだけに穴道湖は偉大な
りと言わなければならぬと思う。本音とし
て松江から穴道湖を取り去った何が残る、
と言いたいね。その意味で孤呂二君に鼓う訳
ではないが、僕の見立てた郷愁をそその句を

二、三句、

城だけは残り日本は民主主義

旅便り漁り火はまだ消えずあり

素通りはさせぬ松江の灯がうるむ

与根一——どう

やら穴道湖にお株

をとられた憾いが

あるから僕はこ

らで別な松江を詠

んだ句を紹介した

いね。その意味で

次の句なんかどう

だろう。

城下町そんな誇りを売る銘菓

老松の個性に城は支えられ

日本にヘルンの心とめた宿

鶴丸——しんがりを飾る意味で僕は新し

い松江のイメージを詠んだものを引張り出

してみた。これはこれなりに変ぼうする町の

生態が感じられて面白と思うがいかが、

温泉も湧いて湖北の新名所

嫁ヶ島置き場をかえてみたくなり

穴道湖のイメージかえる橋が出来

商魂が菓子で売出す湖上大橋

通児——このあたりで川柳による松江名

所めぐりを一応措いて、案外知られていな

い、点景的な意味での松江のたえずみを探

ってみるのも一興かと思えます。その点、紫

叻さんは史実にも明るいし、人生的なキャリ

アでも人並み優れた所有者ですので、くさ



町紅

東洋樹

喜美子

どう

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

紫叻——指名されて云々するのもおこが
ましいですが、私の知るところでは、外中原
町側から見て内中原町と片原町との接点、つ
まり昔の外濠であった川を挟んで橋と民家の
ある点景、これはかつて岩波写真文庫にも載
っており、その中の倉敷の白い土塀のある風
景、九州柳川の川を挟んだ寸景と並び賞され
たと聞いていますが、まあこの一角が本当の
意味での松江で一番松江らしいところではな
いでしょうか。

孤呂二——北田町にある古刹、普門院の一
角も岩波写真文庫を飾った所ですが、あれも
松江のイメージにぴったりと思うが、すくな
くとも代表的点景ではなからうか。

通児——いま普門院の話が出たので一言、
私は普門院の中から北堀橋を前景に松江城を
見るのが最高だと思っていますが、とにかく
午前中に見るその景観はすばらしい一言に
尽きますね。

紫叻——数年前まではあの場所は大木が生
い繁っていて見ようにも見られなかったとこ
ろだったが、岩波写真文庫後の新しい案内知
られていない穴場の点景かも知れないね。

祥月——私は城見縄手から城をのぞむ辺り
が何と言っても最高だと思っているし、時代
の変遷があってもあの辺りだけはソツとして
おいて貰いたいと日頃思っています。

鶴丸——あそこは悪いとは言わないが、ど
っかというところ既に古された感があるし、
他の都市でも城下町には同じ類景があり、こ
とさら松江だけが持つ隠された良さとはいく



らか感じが違うよう
うだ。何れにせよ
あの辺り一帯は古
都的匂いの強いと
ころとして旅人の
目を楽しませてい
る点は確かでしょ
う。

与根一——いままでの話題は松江の良さ、
松江の美しさなど十分お国自慢ができたとし
て言うこともないが、僕は最近のビルラッ
シュが気に入らないね。折角の美観を根底から
ぶっこわすおそれが十分だし、既に小柳らみ
子の歌う、城下町のイメージのような低い屋
並みの続く風景が虫はまれつつあることは見
逃せない。

町紅——僕も同感、それに加えて宍道湖か
ら市内へ向けて縦横に巡らされた堀割りの濁
りきった状態を何と見ていいか、最近ポンプ
アップで水の動きだけは、お茶を濁した程度
の効果があったと見受けているのだが、何れ
にしても抜本的対策が欲しい。

晃男——人それぞれに秘められた恥部があ
るように、その都市、その町にも相応の恥部
がある訳で、大阪でいえば道頓堀がそれに当
り、当松江では矢張り京橋川あたりが符号し
そうだね。元来、恥部というものの持ち味は
人の意味では、そうした一連の川の汚れ、ゴ
ミの散乱、空気の汚濁等々は、特に恥部をさ
らけ出したも同然で、町紅さんの言葉なら
ず、市政にきつい注文をつけたいね。



通児——まあ恥部論はこの程度に願って、
松江における川柳の足あととに触れてみたいと
思います。私の聞くところでは、明治末期か
ら大正にかけて、村尾珍馬さんによって拓か
れた、と伺っている訳ですが、かなり古い歴
史の歯車の営みが続いているものと感心し
ていますが……。

紫吻——その後、大正中期になるかな、洪
柿会が生れ、その中に孤呂二君のお父さんの
孤呂一さんがおられた訳で、その意味では父
祖二代にわたり川柳の絆が続いていて、なお
孤呂二君の場合、現役のバリバリとして精進
しておられるのは頼母し限りですね。

祥月——さらに、その後、新聞柳壇の開設
にもなつて川柳人口が急激に増えつづけ、
現在ここにいる通児君、町紅君あたりも、当
時の新聞柳壇選者であつた米村あん馬氏の門
下生だったと記憶していますし、現在の中堅
クラスは殆んどと言つていいぐらい新聞柳壇
と大なり小なり関りあいておられると見
ますね。現在、尼緑之助さんが新聞選者を担
当していますが、一と月前まで紫吻さんが選
に當っておられたことからみてもそのことが言
えますね。

町紅——いま祥
月さんが言つたよ
うに僕も通児君も
当時昭和十五年ご
ろ、新聞を通して
足がかりとした訳
ですが、考えてみ



ると当時十五、六才だったと思う。ところが
いまはどうだろう、別に昔がいいということ
ではないが、最近の同年代の若者たちの周り
には余りにも余分な遊びが多すぎるように思
うが、どうだろうか。ヘンな漫画本に首つた
けになるのはまだいい方で、轟音を上げてつ
走るオートバイ族、果ては女の子の噂話に
うつつを抜かす……、まづざつとこんな状
態。川柳の入り込む余地は残されていないと
見るのは僕の偏見だろうか。

通児——まったく悲憤やるかたない世相に
は違いないが、僕には、とくに島根の場合、
まだ救いがあるように思う。というのは、ご
承知の隠岐高校のように課目外であるが数年
前から川柳部が設けられ、会誌発行等により
かなり充実した作句態度が見受けられている
事だ。

与根一——いや隠岐高校でも問題があるの
ではないかと、勿論、田中登志先生のご努力に
は敬意を表したい。しかし考えてみると現在
まで川柳部で育てられた若者たちが卒業後、
何人、既製作家として川柳に情熱を傾けてい
るかということに
なると、数字のう
えではおそらくゼ
ロに近いという気
がする。

晃男——こんな
中であぐらをかい
て時の流れを静観
していても芸のな

い話だし、かと言って此所で一番、ともいえないところに今の私たちの持つ巡り合わせがあるのではなからうか。

通児——この問題、松江に限られたことではなく、全国的なすう勢として明確に感じられる点であって慨嘆してばかりいてもウチがあかないと思います。したがって、今後もし若年層の育成に取組みを持つとすれば、全国的な問題としてとり上げて、より論議をつくすべきではないかと考えます。今夜の座談会で一番重要なポイントが案外ここにあつて、松江を語る場から方向音痴的に流れた点、司会の拙ない故をもつてご勘弁願いたいと存じます。

★

この「川柳塔まつえ」の座談会は、もっと早く発表する予定だったが、松江の皆さんと編集上の都合でちよつと手間どつたため本号になってしまった。(送っていただいた写真が室内のうえカラーだったので製版が出来なかつたことも原因した。)

今夏、松江を訪ねる予定だったが、昨年は水攻め(洪水)、今年も水攻め(水ききん)とあって逆に松江から避難してくるという騒ぎだった。それはともかく「川柳塔まつえ」の皆さん、ご苦労さまでした。(不)

長野文庫著

『愛媛川柳の流れ』

下共 五百円

今治市港町八丁目 文学社 長野文庫

(振替口座 広島四九三三)

きのう・きょう

本多柳志

◇大相撲名古屋場所で横綱琴板が優勝した。横綱になってからは初めてであり、通算五度目ということ。優勝決定戦までやっての自力で勝ち取った栄冠だったので、其の感激も一入であったことと思われる。数場所前には負けがこみ、からだの不調もあつて一時は引退まで決意したこともあつた、横綱にしてはよくもここで立ち直つたものである。

本人の努力は勿論だが、協会や部屋の苦勞も大変だつたらうと思われる。もしあの時点で引退していたら、まだ使いものになる関取り一人をすたれものにしたことになり勿体ないことだ。過去にもこんなケースはいくつもあつて、少し不調がつづくと周囲から引退を余義なくした、というようなこともあつた。本人の努力、協会や部屋の苦勞と犠牲の上に出来上つた、何百人かの中からの横綱を引退させる横綱制度にも問題があると思う。◇こういった例は独り角界だけのことでなく、見たせは吾々の周囲にはよくあることではある。例えば芥川賞を貰つた途端に文壇から姿を消した作家も一人や二人でない。文化勲章を受けた学者、人間国宝になつた文化人がそれからは、何の文化活動もせず所謂鳴かず飛ばずといった人も少くはない。文化勲章や人間国宝という榮譽は、老化して人間的な活動不能者に与えるのだといつてしまえ

ばそれまでであるが、残念でならないのは川柳界最高の榮譽とも云える路郎賞の受賞作家が、最近相次いで作家活動から遠退している事実である。路郎賞は文化勲章のように老化した作家には到底貰えるようなものではない。将来益々大成を期待される作家にこそ与えられる榮譽だと思ふ。こんな人々が柳界から姿を消すことは、横綱の引退にも増して勿体ないと思ふ、淋しいことである。

これからの明日の作家の路郎賞 柳志

せんば廿五周年 記念川柳句会案内

祝岡橋宣介喜寿

日時 十月十四日(日)午後一時

場所 尼崎市東難波町四の十八の三二 尼崎市立労働福祉会館3F

兼題「喝采」 田中博造 運

「雲」 岡田俊介 運

「妻」 高根夢草 運

「年輪」 定金冬二 運

「道」 岡橋宣介 運

「自由吟」 各題三句 切二時半

席題 当日三題

会費 三〇〇円

懇親会 一、〇〇〇円(十月五日までに予約のこと)

投句受付 十月五日までに一五〇円(郵券可)

懇親会受付 同封にて申込のこと

投句申込所 伊丹市野間イノソ五五一 谷口光穂 宛

主催 大阪府阿倍野区北畠三の一の九 せんば川柳社

同人吟

秀句鑑賞

—前月号から—

西尾 葉

僕は郵便屋さん陽焼けの跡もくつきりと

小島 蘭 幸

作者は郵便局へお勤めだときいてゐる。勿論配達の方ではないが、配達人の、くつきりと陽焼けた跡を見て、御苦労さんという気持ちで生れた句でありましよう。普通陽焼けた跡は、登山、海水浴、プール等とレジャーで出来た陽焼けですが、このくつきりとした跡は、生活の為の陽焼けで、それを苦にしていない尊い陽焼けです。僕は郵便屋さん〃と童謡的発想が大変よろしいし、字余りも一向に苦になりません。

日本のよさを見つけたすだれ越し

越智 一 水

クーラー時代に生れた日本的涼しい一句。簾、簾延、霞貴障子、日本の夏のよさを、私達は再認識せなければなりません。

チヨークで終焉の姿態のこされる

有信新之助

事故現場を冷静な眼で、的確に表現した句。畳の上で死ぬ望みの人間最後の姿を、アスファルトの上にチヨークで型どられた、異状な不幸を、一滴の嫌な血も見せずに言いわされています。ハンドルを持つ人はよくよく注意して下さい。

ためらわずさらりサラサラ溪の水

石倉 旅 風

緑濃き樹蔭で、石に腰をおろした作者が、溪の水音をきいておられる忘我の姿が彷彿としてくる。旅風さんの環境を知っている私には、この句の、ためらわず、がよく効いているし、さらりさらさらがこの句の命であります。然し、サラサラと片仮名にされたのはどうでしょうかな。さらりさらさと水の流れに従って、平仮名で書かれては如何なものでしょう。ペテランの作者には、何か御意見がありそうでしょうけれど、さわあれ、作者の心境がうかがわれる佳句と思います。

気遣いにもならず順応性と云うこわさ

神谷 凡九郎

よくもまあ、気遣いにもならずに生きていられると思う、この頃の社会の中に、人間には順応性というか、妥協性というか、麻痺性というか、保護色みたいなものをもっている。然し人間には考える頭があるから、その保護色が、妥協が、麻痺が、順応性がこわいのである。

母なる大地なんぼでも高うなり

玉置 重人

昔から、天地の恵みとて、天は父、地は母としてなぞらえられてきた、その大地は大きな愛で、やさしい言葉で抱いてくれる母と許り思っていたのに、マイホーム作りのままならぬ土地の値上りを、母なる大地なんぼでも高うなりと、おおらかに皮肉った手腕は誠に敬服です、然しこの句から推して、既にマイホームは建てられていて、あの時買った母なる大地は、なんぼでもあがりよるとその上昇を喜んでおられるようです。

その他の佳句

山波が母の乳房に似たふくみ朝の電話で妻の予定がまた狂い二で割ったり二を掛けたり共稼ぎ電灯をつけても暗い妻の留守感情を殺す塩鯖煙を上げ愛のみを言えば褪せる日のこわさ筆まめになって外濠埋める恋コトコトコト黙秘権の台所

与根 弘生 美代 正朗 牧人 天笑 岳人

▼十月の句会▲

▼堺・若芽合同句会。十三日(土) 午後六時から八木摩太郎宅で。

兼題「箱」「望み」「条件」「度胸」

▼南海川柳会。十八日(木)

兼題「開発」「ケタちがい」「大型」

会場 南海電鉄本社食堂内。

▼南大阪川柳会。二十一日(日) 午後六時

兼題「タクト」「古巣」「逆さ」「不足」

会場 松崎町二丁目、以和貴荘。

水煙抄

秀句鑑賞

—前月号から—

川村好郎

客で来る娘の倅せは去に急ぎ

堀江芳子

わが娘を嫁付がせた母親でなければ詠めない句であり、それを経験したものに一入うなずかせる佳実感句である。嫁付き先へ帰るのをいやがるのも母として心配ではあるが、まぐいっていいそと急いで帰れば夫婦仲もうまくいっているとうれしい思いの中にもう少し居てくれたらと倅せと思う心の隅にフト寂しさが残るのが母の心であろう。

適当に忘れて姑の花鉄

谷川渥子

嫁姑の問題は昔も今もその内容は変わってきても、むつかしい人間関係である。いい姑の心境を詠んだ句も数限りあるが、この句はあっさりとは姑はかくあるべし、かくの如く暮そうと教え自戒している。「適当に忘れて」がこの句のいのちである。

飛行機で行く急用に美容院

谷のぶお

女の生活態度をうまくキャッチしている。早い飛行機と時間のかかる美容院を対照的にならべ女性心理を穿っている。下五を美容院だけで結び多くを省略して、この句を生かしているところがよい。

小さくなってあなたのポケットに入りたし

小谷葉子

ひと時も離れていたくない愛情を卑俗な表現を使わずに、しかも女の熱情をズバリとぶっつけている。多分作者の実感であろう。お仕事もうわの空であろう。それにしてもこれ程恋慕われている倅せなお方は一体誰だろうか。

国境もなくて気楽な渡り鳥

秋月宏方

今世界に所謂独立国と称するものほども数え切れない。それが互ににらみ合い、侵害だ脱走だ越境だと、いつになったら自由な真の平和が来るのであろう。そんな批判を堅苦しく云わずに、国境もなく飛び交う渡り鳥をもって表現したこの句に魅かれる。消化された佳句である。

気にかけて気にかけて不義理を重ね

宮崎美津子

気にかかりながらつい忙しいのと手ぶらでは行けないら立ちき。衣食足りて礼節を知るかと思わざるを得ない。気にかけて気にか

▼川柳東大阪。二十七日(土)午後六時兼題「生甲斐」「試す」「ちよつぱり」

「チャンス」(席題)二題当日発表

会場 東大阪市中央公民館第二集會室。

▼島根県芸術文化祭協賛・第三回島根県

川柳大会は十一月十一日に開催。宿題

「海」午朗選。「夫婦」独仙選。「自転車」大鳥選。「空の旅」紫吻選。「婚約」

明朗選。

投句先—699—13島根県木次町役場教育委員会内。(投句料二百円)

けてと畳み語にしてこの句を生かし、下五の字余りが少しも不自然でなく句全体を強くしている。

笑わせてわたしが這入る墓地を購う

増田竹馬

生きているうちに我が墓地を購う人も少ないが、そんな人は倅せな方であろう。死とか墓とかを詠むととかく暗い句になり易いが、この句はむしろ反対に明るく、「笑わせて」がユーモアもあり、そして何となくさびしさをかくしている心情も含まれている。

忘れずに母なる川に鮭房り

木村濁水

親の膝元を離れ、又は逆らって去ったわが子へ忘れずに親の元へ時には帰ってくれよと待つ親心を詠んでいる。この作家が最近腕を上げてこられたのに気付く。絶えざる努力のためであろう。

ス
ポ
ー
ツ

草 深 醉 升 選

スポーツの力強さをためす雨
 スポーツを見るだけ好き趣味の欄
 スポーツに花を咲かせて見合
 スポーツマンシップ宣言入道雲を突
 スポーツでできた足でよく稼
 球一つ追う目満場炎天下
 ギャンブルにもスポーツは流行り
 カッコいいスポーツをかじって
 スポーツの花形を待つ黒い異
 コソ泥はスポーツ一家と知ら
 スポーツに凝る家業に身が入
 朝刊のスポーツ記事は見逃さ
 ラケットを親子で握る夕たの
 履歴書へ特技スポーツと書く自
 スポーツのように春斗旗を振
 スポーツは万能ピリで卒業す
 スポーツの真似ごと畳の上でや
 スポーツ紙活字のかさで勝負
 週休二日キッチボールの父と
 スポーツで鍛えて喜寿もつい忘
 スポーツで結ばれ異国の土を踏
 大学までスポーツ一途に行く二
 根性をほめられ万年補欠で居

スポーツが知らんが贅沢な遊び
 スポーツが大の苦手でよく太
 逆転を信じチャンネル替えられ
 母親の助言がきいた金メダル
 スポーツに人種差別のない平和
 スポーツで鍛えたらしい肩の幅
 スポーツは何でもこいの力瘤
 マラソンならまだ七十の膝さ
 政治家の難題スポーツがとり
 一秒の十分の一を胸で切り
 スポーツ万能日曜毎にかりだ
 老教師孫を相手のランニング
 スポーツの劣性遺伝孫にみる
 スポーツで鍛え明るい母子家
 野球放送テコでも動かぬ腰を
 スポーツの秋を思春期ふさぎ
 スポーツ欄茶の間の意見対立
 スポーツ好きや人見る人落
 スポーツの無理が祟るレント
 佳
 スポーツに噴き出る汗を掌で弾
 僕のスポーツ走ること歩くこと
 スポーツ欄今日は課長とウマ合
 泳ぐよに当てた執念の決勝打
 泥んこになつて熱戦くり上げ
 人
 スポーツが泣いてる人間共の欲
 ラジオ体操テンポのちがう交
 天
 ほんとうに好きで外野に席があ
 弘朗
 扇水
 カズエ
 曉童
 緑水
 敏
 英詩
 みのる
 翁童
 無人
 静泉
 隆子
 代仕男
 寿美子
 古心
 克枝
 正朗
 綾女
 曉明
 旅風
 古方
 重人
 弘生
 肖二
 凡九郎
 奇童
 千翁

へそくりを巻きあげる気の里知り
 へそくりを上手にかくす出納簿
 値上りの土地にへそくり追いつ
 へそくりで夫の小言封じ込み
 へそくって良妻賢母の顔でいる
 父ちゃんに内緒へそくり出して
 旅に立つ子へそくりを渡す母
 へそくりを狙つた孫のお手伝い
 アルバムのきにへそくり隠し込み
 へそくりもへそくりを移動させ
 大掃除先ずへそくりを移動させ
 泥棒の勘がへそくりが出た土蔵跡
 御先祖のへそくりが出た土蔵跡
 宵明
 不醉
 富子
 素身郎
 明春
 七面山
 翁童
 代仕男
 思月
 一郎
 肖二
 本蔭棒

森 田 布 堂 選

へそくり

・残部少々
 『清水白柳遺句集』千共 七百円
 後藤梅志著
 『秀句鑑賞と梅志句集』
 送料共 六百五十円
 高鷲曲鈍著
 『白黒記』 送料共 七百五十円
 ▼申込み順に送本いたします。

寒冷地手当へそくることに決め
へそくりも無いと安東が苦笑する
へそくりも惜しまずはたき嫁に
へそくりを出せと言わずに貸せ
見つかった時をへそくり考える
へそくりの貯金帳しまいどこ忘れ
へそくりはとへそくり子に持たせ
盗難にあったへそくり口にせず
妻のへそくり知ら亭主でお人好し
へそくりもはたき骨董品あさり
へそくりを慌てさせてる洗濯機
へそくりに救われた日の苦心談
へそくりがこんなにある遺産分け
へそくりにかしこまる日の親不幸
元の位置へ妻のへそくりそ置き
へそくりの置場も忘れ脳を病み
やりくってへそくりで癌で逝く

住
へそくり家計のほかに夢を持ち
へそくりで結局孫を甘やかし
へそくりで夫婦で思い合い
へそくりの置場時々確かめる
へそくりを甘い話が釣って逃げ

人
夢ひとつとつへそくり積んで
地
へそくりが急場をしのぐ糧となり
天
へそくりを掛けた無尽に夜逃げ
軸
どたんばで出すへそくりに助けられ

弘 朗
寿 美 子
秀 子
木 魚
克 枝
明 朗
明 多 子
古 心
祥 月
秋 月
カズエ
曉 童
奇 童
英 童
章 童
里 風
真 祐
緑 水
与 根 一
右 近
た かし
智 司
芳 子
綾 女
国 彦

社会面

岡村久志良選

息抜きに大蛇も載せる社会面
社会面番茶のうまい記事を読む
社会面明治吐息をするばかり
社会面そこから今日が始動する
社会面首相は読んで居めらしい
社会面三つの顔を持つ男
悪い奴は遠吠えの社会面
少年A知る人は知る社会面
蒸発をして社会面に載った父
新米に任しておけぬ社会面
敬称をつけたりとったり社会面
社会面を素通りして街のボス
エンマ帖みたいに喧嘩社会面
手違いは我が社が載った社会面
社会面読み飽き車窓雨となる
社会面の隅で昔のスター死に
大國になりすぎ暗い社会面
社会面捨て子の写真あどけない
社会面こわい方から先きに読み
親の期待背負いきれずに記事に
社会面いやに氣にする小役人
社会面明日の頁はうけあわす
社会面ここまで来たがまだ落ちる

バット
里 風
宵 明
白 汀
章 雅
輝 親
伊 津 志
伶 人
七 面 山
白 水
木 蔭 榉
木 魚
耕 水
不 二
度
とんたく
与 根 一
竹 馬
カズエ
球 磨 蘇
弘 朗
扇 水
曉 童

大事件の隅でも古老が一人消え
社会面しゃれが利いてて微笑する
社会面これから先を案じさせ
何もかも狂っておどって社会面
社会面こんな筈ではない命
久し振りがしい記事の朝を出る
子を殺す女だけ責め社会面
善意などミニ記事にして社会面
少年の目に華やかな社会面
社会面ひらくどこかに血の匂い

佳
社会面振れば末世の音がする
社会面政治の嘘にだまされる
社会面息子の記事が光ってる
社会面妻の推理が飛躍する
社会面善意恥ずかしそうに載り
たれながしの活字がちびた社会面
朝飯に叱られてる社会面
社会面斜に読んで靴をはき

人
地
天
軸
無 人
奇 童
千 翁
英 詩
隆 子
季 賢
芳 子
清 一
好 人
綾 女
明 女
緑 水
露 杖
か つ み
祥 月
克 枝
利 美

・残部 僅少・
西尾 栗句集
『水 鶏 笛』 送料共 六百五十円
阿万万的・松川杜的共著
『 的 』 送料共 四百五十円

初步教室

題「恩」

本田恵二朗

更生出来たは保護司の恩と慕われる 三十四

(更生の日へ保護司の恩浮ぶ)

恩人はまだまだ頑固まげていず

(恩人の頑固うれしや衰えず)

あれもこれも頼んで恩に着てまっせ

(恩に着まっせとあれ頼みこれ頼み)

恩給で病まず遊ばずめしを食べ

(恩給で遊ばず病まず食いつなぎ)

恩返ししてから疎遠の仲になり

(恩返ししたら疎遠になりはじめ)

手土産と利子まで取って恩に着せ

飼い主の恩へ小犬はじゃれてくれ

(小犬もう恩を知ったかじゃれてくれ)

人さまの恩で我が道舗装され

(慈雨のような恩でわが道うるおされ)

恩きせてチャリ打算の影のぞく

(打算の飯面かぶって恩をきせている)

恩を仇で返す運命の淵に佇ち

天地の恩を感じた日の素直

(天地の恩しかと見つけた日の素直)

恩給を手にするまでの浮き沈み
恩給を手にしたとたん老いを知り
恩返し出来ず墓参を忘れない
(恩返し出来ず墓石に話しかけ)

六三三あれから忘れた親の恩
恩返しハッピーエンドのメロドラマ
(恩返しはたしてドラマ幕となる)

人生のたそがれご恩に涙ぐむ
恩返っておくのが立候補の下心
(立候補する気が恩を売り歩き)

恩に着ますと銀行拜まれる
恩を着せ着せた方の肩がこり
(恩を着せたらやたらに肩がこり出した)

このご恩忘れませんと雲がくれ
(ご恩は一生忘れまへんと雲がくれ)

君の恩という言葉さえ今は無し
(君恩てなあにと聞かれ語につまり)

孟蘭盆会祖先の恩と花まつる
(盆提灯しみじみ思う先祖の恩)

恩人と云われ財布の口ゆるめ
(恩人とおだてられてはケチられず)

恩に着て返すするのはままならず
(恩に着たもののお返しままならず)

世話かけて心にしみる恩を受け
(世話かけた上に身にしむ恩貰い)

親の恩忘れて恋の字を習い
(親の恩忘れて恋の灯におぼれ)

小包は何が出るやら母の愛
(小包からころげ出てきた母の恩)

恩返し古い考えだと云われ
(恩返しなんて古いと太っ腹)

同品充

同度

同誓二

同頼次

同慶彦

同つた

同美子

同駒子

同生仏

同繁子

同保夫

恩という義理生涯につきまとい
(返えせない恩を背負ったままで老い)

身動きもならぬ恩義へ狭く生き
(物価高なれど恩給耐えており)

大自然に感謝の心恩忘れ
(自然の恩を思い出させた公害臭)

謝恩会老師の目にも見る涙
(謝恩会老師の目頭熱うさせ)

泥棒を知らせて犬の大手柄
(泥棒を知らせて犬の恩返し)

久しぶり恩師にあつて語り合い
(久しぶり恩師の酒量おとろえず)

七光りきらって道別の道
(七光りの恩は着ないたたのらしい)

いつまでも恩を忘れぬ稚拙な字
そろばんで買えぬと知った母の恩

恩の字を噛み噛み不満に耐えている
造反は恩を語らず孔子哭く

胸借りた恩へ胸貸す暗れ姿
親の恩よく知りながらよく忘れ

恩知らず親に貰った顔を変え
腐るほどおくるせ恩に着せて貸し

恩師より禿げたのがいるクラス会
古里の恩師墓石となり給い

名も告げぬ人工呼吸の恩に生き
父母の恩こよなきものと思えども

親切かと思えばそれを恩に着せ
恩と義理語る古さにある安堵

叱られた話はずむ謝恩会
酒だけは藍より青し謝恩会

好一

同球磨蘇

陽山

比呂路

つね

秀村

志津

伊津志

寛

一二三

藤持

重人

賛平

利美

同木陸棒

恩は恩金は金だと割り切られ
開校百年恩師は米寿児らは古稀
恩の意義おほろに霞む現代っ子
恩を着たが裏目になってそれっきり

同 貞 同
祐 祐 美

明治生れ徒弟の恩義をまだ続け
改造論天地の恩を忘れはて
ぬけぬけとご恩忘れぬなどと言う
恩人の娘を妻にした弱味

同 同 同
寿美子

題——運——十月二十日締切(十二月号発表)
宛先 岡山県倉敷市下津井三五二 千七百一
本 田 恵二朗 宛

北陸小松川柳大会

写真も 板 尾 岳 人



美しい山はいつ見ても美しい。その美しさの中に川柳が生れ、育った小松の街に白山を仰ぎ見る墓地公園の中で、白柳先生のいつも変らぬ笑顔がボツカリ墓標の中に私達へ「煙むたい、煙むたい、有がとう」そんな声の中に四方天弘美氏の御経によって合掌一心、伊藤茶仙氏の胸中を私達は断崖にゆれ動く山の男に似た静動美をのぞかせてもらった。

一人ひとりがお線香をお供えして、心で喋べる手つきが白柳先生の温い瞳を想い浮べ、川柳の前進する音が墓標の中へ消えて行った。又来ます。又来年も。

川柳の敵は川柳である。そこに不安のない者は、迷いのある者に比べて好感を持って迎えられるので、自分のことを他人まかせにしてはいられない。そんな気がした小松川柳大会に、山上千太郎先生するどい笑顔に私は叩きつけられた想いでした。

大阪の皆様へ

四方天弘実

このたび第二回小松川柳大会がおかげ様で盛会裡におわることが出来たのは遠路川柳塔のみなさんご参加、ご協力のたまものと感謝しております。ゆっくり交歓会も出来ませ

んでしたが、和やかで楽しい一夜でした。大会運営にはまだまだ支障もございませんが今後ともご指導ご鞭達の上、末永くご交際の程よろしくお願い申し上げます。
ご出席の方々へ誌上を借りまして重ねて御礼申し上げます。

第三回八尾市文化祭市民川柳大会

時 十月二十一日(日) 正午
所 八尾商工会議所 三階ホール
近鉄大阪線八尾駅下車南東
八尾市役所向い

兼題及び選者

苦 伊 藤 勢 火
下 ラ 香 川 醉 々
黒 女 板 龜 山 恭 太
広 旗 坂 菊 沢 小 松 園
飾 旗 場 高 杉 鬼 遊
十月十五日締切(各題三句吐)
〒581 八尾市本町二丁目
八尾市公民館内 川柳係

用紙 4cm×22cm 一枚一句宛
(裏面に雅号又はお名前明記のこと)

大 萬 川 柳

「かけ持ち」

入選発表

選者 川村好郎

投句総数 五百九句
入選 六十一句

かけ持ちへ影もせわしく従いて

大阪 弘生

出札のキップも切つてある小駅

豊川 度

タレントで稼ぎ議員でございます

板井 雀踊子

かけ持ちへ仲居疲れた足袋の裏

今治 宵明

経文を略しかけ持ちする和尚

岸和田 かつらぎ

かけ持ちで稼いだわりに貯めて

守口 笑風

かけ持ちのリズムが狂う日の暑さ

米子 千代

かけ持ちの視線時計へ向きたがり

尼崎 利美

ペンネーム本名よりもよく稼ぎ

尼崎 徹也

かけ持ちへ三味線の糸締め直し

大阪 賛平

かけ持ちを承知で雇う求人難

松原 重人

かけ持ちの電話せわしい音で鳴り

岡山 品充

神戸 どんたく
暑さにもめげず本宅二号邸

倉敷 素身郎
かけ持ちの見合いどころも欲とき

橋本 木魚
かけ持ちの弁士へ後がまだ来ない

倉敷 桃里
かけ持ちの一役解けて抜くビール

名古屋 弘志
かけ持ちの愚痴が出てくる共稼ぎ

大阪 章雅
講師かけ持ち名だけは広く売き

奈良 本蔭棒
かけ持ちをうすうす知った妻の勘

藤井寺 吸江
社長と呼ばれ奥さんとも呼ばれ

富田 花梢
本職がどれかわからぬ名刺出し

倉敷 梁水
かけ持ちの愛とは知らずのぼせ

かけ持ちで一人前という稼ぎ

倉敷 梁水
かけ持ちの仮面は秘書が持つて

かけ持ちで金にもならぬ役を持ち

島根 芳子
披露宴かけ持ちゆつくり飲めも

妻、おんな、母かけ持ち満ち足

大阪 あいき
チップはずんだ方へ仲居付き

かけ持ちの見合いどころも断られ

大阪 柳志
かけ持ちの教師どちらにも自習させ

舞台着のままでかけ持ち遅れて来

大阪 緑水
かけ持ちで人手不足に耐えている

友情のかけ持ち病欠カパーする

八尾 美幸
かけ持ちの祝辞へ信号長過ぎる

シャッターを閉め母となり妻と

倉敷 春日
自宅と病院かけ持ちという博士

学校とステージかけ持ちするス

平田 代仕男
ウインクで媚かけ持ち座を外し

かけ持ちの座敷廊下で息を入れ

かけ持ちの当座おもしろい

佳句
和歌山 太茂津

お見合のかけ持ち相手も次があり

大阪 文秋
また次へまわす櫓を片付ける

かけ持ちの外野もひまな草野球

米子 千代
かけ持ちをこなす心のキも締め

看護婦のかけ持ち長き病廊

八戸 かつみ
かけ持ちがお義理の息でかけ

倉敷 耕水
かけ持ちの足袋のコハゼがは

人ノ句
呉 英詩

改札兼駅長ローカルのどかなり
地の句

大阪 小松園
かけ持ちの舞台に見える雲の荒れ
天ノ句

富田林 弥栄子
慶弔をかけ持つ花屋無表情

選者吟
虫好かめ会議の方は代理やり

選後感

。「かけ持ち」は昭和三十四年に
同じ大萬川柳に出题されました。
それを知って私は今回も出题し
ました。十余年の時の流れに句想



川柳たけはら二百号記念

第16回近県川柳大会

小浜 牧 人

九月二日、この近県川柳大会に関西側から
中島生々庵主幹、菊沢小松園副理事長をはじめ、
垂井葵水、高杉鬼遊両氏に牧人が出席した。
「川柳たけはら」は情熱の山内静水氏
がひきいる家族的好グループで、新進気鋭の
人が多いだけに活気があるようである。

一日は先発三名は（小松園、葵水、牧人）
倉敷市の大原美術館を見学、夕刻には竹原の
柳友を迎えられ頼山陽出生の史蹟に近い閑静
な磯部旅館に入った。

五	克枝	一四、〇倉敷	一九	牧人	九五、神戸
六	文秋	一四、〇大阪	二〇	美幸	九〇、八尾
七	好一	一三、五大阪	二一	緑水	九〇、大阪
八	醉夢	一三、〇香川	二二	重人	九〇、松原
九	真沙子	一三、〇堺	以下略		
一〇	史好	一二、〇松原	昭和四十八年度第十一回		
一一	吸江	一一、〇藤井寺	「ババ」五句以内		
一二	梁水	一一、五倉敷	締切 十月二十日		
一三	一栄	一〇、五大阪	昭和四十八年度最終回		
一四	本蔭棒	一〇、〇奈良	「結末」五句以内		
一五	代仕男	九、五平田	締切 十一月二十日		
一六	桃里	九、五倉敷	投句先		
一七	翁童	九、五倉敷	千五九三堺市場上緑町一の一の三七		
一八	芳子	九、五島根	藤井一二三方		
			大萬川 柳係		

「たけはら」の特長はご承知のように中・
高校の少年少女が「竹の子」の伸びるように
川柳を伸ばしている。そんな中で著居、その
みこ夫妻の愛嬢とさん（六歳）が、おとな
を尻目に堂々入選の佳句を発表して満場の大
喝采を浴びているのが強く印象づけられた。
生々庵主幹の挨拶は路郎先生の「川柳は人
間陶冶の詩」であるを引用、大きな感銘を与
られた。小松園氏の兼題の披露が最後に熱気
をはらんだ近県川柳大会は「また来年も」を
合い言葉に、ここをめたく閉会となる。こ
の大会では新鋭小島蘭幸氏のキビキビした態
度が場内を湧かした。葵水氏が第二位でカッ
プを手にし、鬼遊氏も牧人も入賞した。

（写真左から）鬼遊・笑子・いと（番居氏令嬢）牧人・
主幹・葵水・静水・小松園諸氏。（英断氏撮影）

柳界展望

(原稿締切毎月末)

有信 新之助

柳会の諸氏。

▼第十六回誌齡二百号記念
近県川柳大会は九月二日竹
原福祉会館で開かれ盛会。
第十六回近県川柳大会で声
援を一同感謝しています。
静水。

▼中島生々庵主幹は竹原の
近県川柳大会、弓削の西日
本川柳大会へ公私多忙の中
から出席。ますますお元氣
である。

▼麻生腹乃先生もお元氣で
ある。本社へはたびたびお
たよりを頂いている。

▼48年度の川柳塔社の路郎
賞(第八回)は小浜牧人氏
(神戸市)川柳塔賞(第七
回)は堀江芳子さん(島根
県)にきまつた。(本誌参
照)

▼日本海新聞投句者で組織
する川柳友の会の十周年記
念大会が鳥取県遺族会館で
開かれ、参加者七十名の盛
会。総合優勝青木長波氏。

▼島根県芸術文化祭も第六
回を迎え、協賛川柳大会は
木次町で開かれる。世話役
は藤井明朗氏にむらくも川

▼読売新聞八月二十三日付
文芸欄で川柳塔八月号の柳
志、勝暗両氏の「一分間の
柳論」を採り上げ「共に考
えさせる文章」と。小松園
氏の「世間など気にせぬ音
でジャンボ発つ」は面白い
句だと。

▼阪口愛舟氏(番幸河童俱
楽部五月二十二日急逝)の
句集「淡柿」刊行記念句会
が八月二十五日阿倍野王子
神社で開かれ、氏の遺影ス
ライドなど交えて盛会。

▼川柳人四九六号は二月二
十一日逝去された直原那岐
坊氏(津去)の追悼号とな
った。「剣花坊氏の指導を
受けた氏は津山市に在って
地方柳壇の発展に寄与され
た。君の計のたよりとどく
も花吹雪——尺蠖

▼札幌川柳社主催北海道川
柳大会が八月五日札幌市国

鉄エルム会館で開かれ、盛
会裡に年度賞、特別課題
「北海道を詠う」の高点句
の発表があり、年度賞は三
点句平賀克己、高津度明、
宮崎勝子の諸氏に、特別課
題一席は中島夢遊氏

▼岐阜川柳社創立二十周年
記念川柳大会。四八年一月
二十日十日の丸会館岐阜卓
市神田町四丁目。声、意地、
ポスター、正論、三味線、
8ミリ、思案、訪問、好感
母出句出席者のみ。

▼田中不倒人氏(川柳研究
社顧問)が六月十六日お茶
の水順天堂病院で癌のため
逝去。積不倒信士行年七十
二才謹悼。

▼時の川柳が八月号で二百
号となり、三条東洋樹氏は
時の川柳の「時」は現代を
意味し、時は固定せず静止
せぬ如く、我々の川柳も人
心の理解の範囲で、前
進歩調を続けるであろう
と。

▼柳都八月号特集「自選句
の功罪」で河野春三氏が、
柳都の新選集白石朝太郎選
が投句数一句限なのでいや

でも自選を強いられる結果
となり、はしなくも自選と
選者選の新しいパターンを
発見したと。

▼川柳えんびつ七月号で斉
藤大雄氏が、川柳を要約し
て人間陶冶の詩、人間探求
詩といわれているが、最近
詩を忘れた道句のような作
品が目立つ。ことわざを川
柳化したような作品に川柳
人全員が考えねばならぬ
と。

▼七月一日開かれた第四回
北日本川柳大会は八十余名
の参加者を得て盛会。最優
秀句本多とし樹氏。

▼噴煙七月号で高安清風子
氏が、川柳大会のマッネリ
化打破のためにオール席題
制の採用を提唱。具体的な
運営方法を述べた上、全員
白紙の状態に参加するの
で、必ずしもベテランに有
利、初心者に酷とはならず
かわった結果が得られるの
ではないかと。

▼ふあうすから一九七三
年版全国川柳作家年鑑が刊
行されたが、年々収録者が
増え今回は千七百九十四名

になっている。

▼橋高薫風氏が川柳欄を担
当している電波新聞(日刊
全国紙)から、四十七年度
の諸作品を収録した土曜柳
俳歌壇抄という小冊子が刊
行された。表紙カットの画
は石丸弥平氏。

▼西田放亭句集が川柳噴煙
八月号増刊として発行。吉
岡竜城氏の序文に、靈前に
この句集を捧げるとあるよ
うに遺句集である。(非売
品)



誠意と技術で
世界のために

シャープ株式会社

▲第11回三重川柳大会（伊勢神宮遷宮記念）11月11日九時三十分開場。会場は伊勢市・内宮前修養団神都国民道場。雑詠三句同一句四氏選。鈴木九葉・三条東洋樹・榎木聡夢・福永清造。出句料二百円。締切10月15日必着。宿題各二句「橋」田中秀果選「石」黒作二郎選「神」佐藤正敏選「白」鈴木可香選「鈴」曾根幸広選。席題二題、増井不二也選、山岸志ん児選。出句料二百円。当日会費五百円。同所宿泊2食付千八百円。

▼浜野奇童氏（岡山県）八月末久米郡内の中学校国語教師の夏季研修会に川柳講義をしてよろこばれました。九月八日はローカルですがTV出演をしますと。

▼池田古心氏（岡山県）は「かきみ川柳社」の八月吟行句会は奥津温泉へ。大森風来子ご夫妻の出席、そして柳話。盛会でしたと。

▼山田季賢氏（高槻市）病氣全快。広島新幹線工務局からの元気なおたよりがあった。

▼水谷竹莊氏（大阪市）は八月退院。入院中に投句した全電通全国大会に入選。十一月下旬に全快祝いを兼ね句会開催予定とのこと。おめでとう。

▼吉田水車氏（名古屋）は毎月の企画、編集などをおもうと暑いなんて云われないが、老境に入り今年の暑さには参りましたと。

▼福島鉄児氏（高槻市）は墓参に帰郷して奇童会長や巷雨、紫光氏、止水氏と久しぶりに会い歓談された。

▼飯田悦郎氏（八尾市）は日本道路公団一ノ宮名古屋管理局内の電気機械施設などの電気主任として九月三日から勤務。

▼宮口笛生氏（奈良市）の母堂ノブエさん（七七）は十月十日八時二十分永眠。謹悼。

▼弘津柳慶氏（柳井市）は専売公社柳井営業所調査役として十年ぶりに故郷に帰られ、永住することにして目下新築中。

▼小浜牧人氏（神戸市）は八月一日帰省され、開発の

進んだ故郷に幻滅を感じつつも道後温泉、砥部焼、久万町の七夕祭りなどを楽しまれた。

▼不田一三夫氏が八月十九日付新聞（新聞ヘサンデー）読切り小説「時間ですよ」を執筆。今月はポルノではなく浴場綺譚。

▼竹原の大会に出席した生々庵、小松園、葵水、牧人鬼遊の諸氏から寄せ書「絵葉書の本物にきて立ちすくむ——葵水。なお葵水氏は大会第二位のカップを、また牧人、鬼遊氏もそれぞれ入賞した。

▼栗団長以下二十名で小松大会行。九月一日夜は粟津温泉で賑やかな夜を過ごされ黒部から旅信。

た。栗、薫風、柳宏子、岳人、弥生、君子、智子氏らの寄せ書。宿浴衣はくれたようにいうている——栗

▼橋高薫風氏（豊中市）は八月に北海道へ旧婚されたが、九月三日から母堂との回目の四国巡拝へ、伊予の香園寺で第一夜を過ごされたが、採手で寄付を募る和尚にやささか懷疑的。

▼児島与呂志氏（大阪市）の長女、美千代さん（二四）はこれほど良縁を得て婚約、十一月十一日の吉日に和歌山県那賀郡岩出町則本六四の一野田雅宣氏（二九）と挙式。おめでとう。

▼金井文秋氏（大阪市）は

▼第7回串かつ川柳大会は11月3日。会場は呉市総合福祉会館大ホール（呉市中央五丁目12番21号）。宿題各題2句。「主婦」「軽い」「近所」「青空」「相談」「選手」「背信」「破る」「洋酒」「強気」投句料二百円。737 呉市本通四丁目六番一七号、串かつ川柳会。

▼水郷川柳社主催の愛媛夏の川柳大会の寄せ書を米沢

本社九月句会

会場 以和貴荘

七日 午後六時

さすがに九月にはいとやや涼しい。いよいよ作句シーズンにはいる。出席名簿がドン埋まっていたのがありがたい。

柳話に円熟味を増してきた多久志氏が「まちがひ易い四字の熟語成句」と題し、正確な文字使いに徹底するよう呼びかけられた。

選句中に意味のわからない文字にぶつかった時の苦心談をよく噛みしめていただきたいものである。例によってプリントを配られ、必要とする方にはお送りすることであるから、かたがたこの柳話を生かしていただきたいものである。

今月の月間賞杯は好作家有信新之助氏にかがやいた。

進行・西田柳宏子

出席―新之助・与呂志・葵水・文秋・静馬・一三夫・たかし・肖二・綾女・花梢・柳太・緑水・秀信・生々庵・滋雀・牧人・正彰・百酒・一舟・一二三・古方・メ女・いわを・酔々・雪二・好一・瓢太・柳志・眉水・多久志・形水・幸太郎・美幸・好郎・喜風・三十四・太茂津・千万子・儀一・俊夫・米子・葛

城・茂男・好男・柳宏子・野迷路・芳川・摩太郎・吸江・鶴声・以兆・栗・維久子・慶之助・智子・静香・君子・清人・雀踊子・静歩・いさむ・小松園・岳人(七月出席)凡九郎・あいさ・重人・天笑・庸佑・弥生・鬼遊・敏・葉子。

席題「腹案」

阿部 柳太選

腹案は秘書にまかして飲む話 三十四
腹案を二号の部屋で告しゃべり 千万子
腹案は伏せてブレインの意見訊き 百酒
お手盛の腹案相手に一蹴され 誓二
面白い腹案出して顔が売れ 儀一
再考の余地あり腹案認められ 与呂志
腹案にしてはビジョンが大きすぎ 生々庵
腹案のホームへ土地が狭く締め 牧人
腹案をもうかぎに来た社のネズミ 雀踊子
饗応の美酒腹案をとかず あいさ
腹案があるから騒ぎに遠く居る 滋雀
腹案を根掘り葉掘り聞く謀者 眉水
反対のムード腹案しまい込む 鶴声
腹案は結局金に押えられ 重人
腹案に予算のカベが厚すぎた 凡九郎
腹案は腹案として処理をされた 百酒
腹案は伏せて団交の強い腰 雪二
ええ意見出たので腹案引込める 綾女
腹案と違う結果に社長ごね いさむ
腹案ヘクイズのように顔を寄せ 酔々
腹案を練り直して出し遅れ 網渡りのような腹案あたためる 酔々

席題「感化」

西村 芳川選

腹案のとおりには相手乗ってこず 一三夫
ワンマンの腹案異議をさし控え 百酒
腹案へ欲欲欲が輪をひろげ 清人
腹案へ先手をうってきた手紙 花梢
寄付金に触れて腹案しゃべり出し 君子
あんまりな結論腹案しもうとき 天笑
一夜漬けでできた腹案たかが知れ 喜風
風向きが変り腹案ひるがえし 儀一
金の入る腹案相手の出方待つ 花梢
腹案と腹案肚をさぐりあい 秀信
酔わされて策士腹案ド忘れし 摩太郎
腹案を話せば俺の裏をかき 庸佑
腹案を秘めてる親父叱らない 与呂志
妥協する気の腹案を見すかされ 花梢
反対をする腹案も出来ていた 文秋
腹案ヘゲルにはなれぬ正義感 滋雀
腹案を打ち明けられてからあわて 柳宏子
反対をさせて腹案に近づける 小松園
腹案を出せば出したで眼がにらみ 一二三
ドタン場に浮かぶ腹案欲をぬき 喜風
腹案はないと腹案ひねくれる 柳太

コマーション悪い言葉と子は知らず 以兆
奥さんの感化で値切る市場籠 柳太
美しい山に心も感化され 岳人
いつ妻に感化されたかケチになり 好郎
子の感化父もゴルフへ若返り 好一
いつのまに憶えたハシゴ酒の味 葵水
右上りの文字にもあった師の感化 維久子

けちんばの一人息子の子金使い 幸太郎
 気の弱い長女次女から感化され 眉水
 実子かと聞かれる程の嫁になり 一舟
 子供まで感化されてた倦怠期 天笑
 三十年の感化は遂に尻に敷き 綾女
 感化院母想う子は早く出る 牧人
 色街に育ち芸者になると言う 文秋
 黙々と働く親で子が始め 清人
 お互いに感化夫婦でお人好し 形水
 テレビから悪いとこだけ感化され 百酒
 ご近所が男児ばかりへママ案じ あい夫
 ブロマイド胎児の感化を願う顔 俊夫
 友人の感化この頃少し飲み 柳志
 マスコミの感化をうけたカムバック 一三夫
 母の顔知らないままに感化院 以兆
 先生の感化を受けたとも言えず 葵水
 朱にそまりそこね抜擢されている 岳人
 仲の良い夫婦にコケシ感化され 重人
 黙ってる父の感化を受けた血が 一三夫
 立志伝感化院から受けた上がり 好郎
 感化され感化をさせて夫婦なり 小松園
 懺悔する頭の上の鐘が鳴る 芳川
 大阪でもまれ忘れた国訛り

席題「しとやか」

高木幸太郎選

しとやかな母のテンポをはがゆがり 君子
 来た当座だけしとやかであつただけ 摩太郎
 おしとやかななどしとびれを切らさず 天笑
 しとやかな方が息子の氣に入らず 柳太
 しとやかな女で何かもの足らず 一三夫
 しとやかになればなつたで母案じ 好郎

しとやかな娘と見えぬサングラス 柳志
 しとやかな母に船場の香りする 喜風
 別人になつた晴着のしとやかさ あいき
 しとやかな紅一点へ目と目と目 清人
 茶室出てまだしとやかなお茶もたて 柳宏子
 変身の妙しとやかにお茶を通して来 維久子
 しとやかに女の意地を通して来 柳志
 三ッ指を突いて親まで騙される 与呂志
 しとやかな妓の酔ぐ酒の程の良さ 生々庵
 しとやかか明日は裏切る目と見え 清人
 しとやかにしとやかに脱税す 一三夫
 しとやかに見えたが河内言葉なり ジャスミンがほのかに匂うしとや 酔々
 内股で歩く花緒のきつい下駄 雀踊子
 しとやかに育つた不幸フト感じ 雀踊子
 ざあまずと猫が呆れるしとやかさ 一二三
 しとやかをかえばテンポののろい 維久子
 しとやかな女の通るすきま風 三ッ指のクソ丁寧に断られ 滋雀
 計算をしないでしとやかさを小出しする 古方
 しとやかな受付社風惚ぼせる 牧人
 しとやかなあの娘にこんなかくし芸 静香
 しとやかな女にかえる足袋を履き 多久志
 しとやかな娘だつたに赤い爪 摩太郎
 しとやかな所作にまふまふとひつか 庸佑
 案外に出る処にのりしとやかさ 幸太郎

兼題「実力」

垂井 葵水選

実力が趣味な友に変えていた 柳信
 実力を磨くやつぱり金が要り 季賛
 実力の点でニセ医者ヒケ取らず 一栄

実力の指に算盤素直なり 祥月
 寝返りをした実力を恐れられ 千万子
 実力を見えぬ鎖で縛られる 悦郎
 どん尻を走るわが子の力知る 日満
 口に出す実力たかが知れている 秀信
 実力があるから声も大きいぞ 野迷路
 先代の実力道理を曲げさせる 眉水
 実力を笑うた妻の歯が白い いさむ
 実力に触れず不運と慰める 好郎
 暫くは傍観してる実力者 形水
 実力は銀行からも来た櫛 いわを
 貫録に押さえて実力出しき 眉水
 実力がよるけるそう反らないで 茂津
 実力が出て埋れ木が見直さ 凡九郎
 実力はあるが学歴ない不運 一三夫
 実力は五分と他人は見居らず 庸佑
 実力の勝者泣かせた母の声 弥生
 実力主義に徹して夢のない男 君太
 実力の替りに札ビラ切りたがり 鬼遊
 腕相撲時には父に敗けてやる 凡九郎
 見た通りの男でふとさきりげない 柳太
 実力を出せるポストにまだ着かず 柳志
 実力者ときには壁と対話する 一三夫
 金蔵があるうち実力者に紀りあげ 柳太
 大学卒と言う実力を疑られ 維久子
 味方より敵が嘗めてる実力者 柳志
 姉御とも呼ぶたい女実力者 幸太郎
 長い眼で見えておくれやすと慌てない 凡九郎
 実力者まだ叱られる老母があり 多久志

実力もあり要領もよい男 三十四
実力の一声会議を締め括り 智子
実力を溜め吊皮に揺れている 酔々
実力行使次元の違う顔ふたつ 俊夫
実力者達の世界も見てかえり 茂人
実力のないのが先に吠えている 居男
脱サラの誤算退社をしてさとり 葵水

兼題「ロマン」

小浜 牧人選

別居して寮でロマンを読み続け 季 賛
打ち寄せる波がロマンを乗せてくる 柳 信
殉教のロマン哀しき城の跡 香珠美
妻と私のロマン喜劇を繰り返し 日 満
宵の色老いにもロマン拾えそう どんたく
伝説のロマン都市化に埋没し 好 一
若き日をつづる日記にあるロマン 維久子
ヒロインのロマンドラマに生きている 静 馬
青春のロマンもなくて蓄めつづけ 柳 太
中年のロマンは金が必要となり 柳 志
父のロマン許せる父の齢となり 柳 志
華やかなロマン喪服の袖に見せ 柳 志
万葉のロマンを削るダンブカー 柳 志
どぶ川もネオン映してロマンめく 静 香
どん底の生活にロマンを失わず 滋 雀
少女のロマン日記空白のまま続き 生々庵
この島のロマン椿の花が咲く 肖 二
山に来て山のロマンに酔いしれる 綾 女
十字架を背おう女の手持つロマン 雀 踊子
一瞬のロマン花火はパット咲く 酔 々
口開けた寝顔の妻にロマンなし 多 志
テレビ消す妻のロマンも終るなり 鬼 遊

大ロマンに諸行無常を語らしめ 誓 二
中年の恋にロマンのない打算 静 馬
回想のロマンへ胸の頁繰る 滋 雀
地の果ての夕陽へロマン捨てに歩く 天 笑
思春期の胸にロマンの灯が点り 緑 水
西成で明日のロマンを抱いて寝る 静 歩
英雄のロマン末路は綴るまい 肖 二
出稼ぎの夢はロマンのある放郷 一 舟
ジ・エンド恋の孤りは雨になり 小松園
人妻としてのロマンを抱きつづけ 花 梢
落ち葉掃く尼僧に遠い日のロマン 緑 水
定時制星を見つめているロマン 重 人
灰色の中のロマンは喜劇とす 君 子
糸車ロマンの綾を織りつづけ 酔 々
絶景かロマンの中にとけている 庸 佑
スモッグの街でロマンが褪せてゆく 智 子
ブランデーグラスにロマン浮かぶよう 天 笑
海鳴りの海へ男のロマン追う 牧 人

兼題「柱」

傍島 静馬選

城郭の柱昔のままの肌 祥 月
南天の柱で稼ぐ銀閣寺 旅 風
正面の柱に掛けた恩師の句 一 栄
組立柱グレン玩具のように釣り 季 賛
頼られて柱にされて縛られる 柳 信
ワッペンをべたべた孫が張る柱 香珠美
妻も子も一家の柱と思えとらず どんたく
朽ちかけの柱が文化財に生き かつ子
文化財のケヤキの柱の艶もよし 摩天郎
工場の柱賃上げビラを貼り 形 水
電柱が庭の風情の邪魔をする 花 梢

それまでは杖とも柱とも言われ 百 酒
鉄骨の柱先代気に入らぬ 小松園
火柱を立てて地の神いきどおる 酔 々
新築の柱の釘を叱られる 幸太郎
電柱にわが家の窓から手が届き 以 兆
柱背にため息つけば芝居めき 一 三
建て売りの柱危なかしい太さ 文 秋
刀痕の柱の部屋の暗いこと 我 我
柱にもまれず隣り合うの軸となる い 我
置薬柱にかけの峠茶屋 一 三
女房を柱に凭れている平和 一 三
腕白時代しのぶ故郷の柱きず 君 子
人柱埋めた哀史を聞く古城 多 志
落ちていく旧家に光る床柱 花 梢
柱また細い図面となる値上げ 一 三
電柱にもたれて生酔い野心あり 多 志
鼻柱の強い男で女好き 三 四
遅刻した罰に座った床柱 好 一
お互いが柱となって支え合い 吸 江
柱とも杖とも頼むとおだてられ 庸 佑
柱だけ建てて工費が行きづまり 三 四
柱とも頼む四番が三振し 庸 佑
顔かくす柱の向う好きな人 芳 川
手の届く限り電柱貼られてる 葛 城
蟻の道辿れば柱いかれてる 好 水
大口の債権者として床柱 形 郎
くくられた柱も今は懐しい 小松園
電柱があるので犬は思い出し 滋 雀
柱からヤニが出ている安普請 静 馬

兼題「ひとり」

川村 好郎選

ひとり只夜空をにらむ施設の児
ひとり子の夢は人形に開まれる
ひとりず呼んで重くもない賞与
俺ひとり残して逝くなどはエゴか
パチンコの中ひひとり歩きがはね返す
アドバースひとり歩きがはね返す
遺児抱いて女ひとりの遠い道
ひとり居る時をつしむ齢古稀
そむかれて女ひとりで聞く晩鐘
ひとり旅心の棘を抜きに出る
一人だからこの名月に窓を閉め
選り好まないにひとり見つからず
それだけの道あり老婆ひとり住む
ひとり身の涙自分にも言い聞かせ
焦点をしれば人生ひとり旅
女ひとりうそに疲れた終電車
ひとり酌む酒に秋の夜長知る
さだめとは諦め切れぬひとり旅
雑音にわかれ女ひとりの生きるみち
影だけがひとりの僕についてくる
喪が明けて遺影と対話するひとり
女ひとり暮らし株式欄を見る
ひとり身の気軽さ上司へ桶をつく
補聴器をはずしてひとりいる気楽
ひとり居る部屋にゴキブリ這いまわり
まだ一人でつかと鉦つけてくれ
ひとり来た思い出の丘枯葉舞う
ひとりでゆけば財布の紐をしめ
母ひとり矢面に立ったハツ当り
社会福祉の隅で老人ひとり居る
表面は女ひとりという笑顔

祥月 一栄 日満 維久子 香珠美 幸太郎 弥生 静香 生々庵 文秋 多志 秀信 清人 誓二 維久子 小松園 緑水 重人 静香 鶴声 柳太志 柳太 静馬 柳宏子 弥生

ひとり来てひとりで惜しい景に立つ
一匹の蚊に負けた夜のひとりもの
夫まだ夢に生きてるひとりぼち
ひとりにとまれ哀しみをうたわれ
ひとりごとつぶやきおうて老夫婦
維查のひとり一人にある歩巾
一枚の枯葉に我が身置いてみる
女ひとり暮しを飾る四季のいろ
逆境へもうひとりの私に文えられ
一人になっても涙の過去をさみかず
同情がひとりにさせてくれぬ酒
ひとりとも知れどひとりで生きられず
(河井庸佑整理)

形水 吸江 女秋 文三 美幸 清人 花梢 弥生 生々庵 新之助 好郎

▼七月兼題「路傍」菊沢小松園選(前号分)
路傍に落し穴ある 詰将棋 亜鈍
横柄な問いへ路傍の僕の嘘 日満
燃えたのは昔路傍の人となる 鬼遊
離れなりに路傍の草にも春がくる 多志
離婚して路傍の人となり終り 久志
落選の日から路傍の人になれ 天郎
生きていてよかった路傍の隅でよし 岳人
振り向きもされず路傍の石に似る 大輪
踏まれても路傍の石はじつと耐え 緑水
ただならぬ仲と路傍の石が知り 通児
追いかけて出そよなとこにドライブイン 緑之助
御堂筋どこまで二人歩く気か 吸江
こころなき人うらまえず道しるべ 素郎
旅ひとり路傍の微笑を抱いて寝る 不郎
路傍の人から野次馬として走り 葵水
物思い路傍の石に蹴つまずく 祥月

路傍の野仏も友ひとり旅
路傍の石に落ちつく尾底骨
しやがみ込む路傍に蝶の列をみる
草の葉の不覚路傍とは知らなんだ
邪心ふと路傍の花がきれいすぎ
移り氣を路傍の草になどられる
花街の路傍多情の子が育つ
いきつりは面を伏せていく歩巾
伝説を知らず路傍の石を叩く
道ばたへ寄っても悪いダンパカー
路傍の雑草でさえ花を持
ベトナムの路傍へ心奪われる
行きずりの路傍でなだめ役にされ
蹴るだけの石ならそっとしてはしい
朝市で路傍の花を妻と買う
女もう路傍の青を妻と買う
路傍の石どころか日本ゴミだらけ
路傍の目意識せぬのかこのふたり
いうならば妻も路傍の人だった
ストのピラ今日は路傍の人とせず
(以下次号)

幸太郎 喜美子 重美子 滋子 千万子 花子 叮紅 誓二 美幸 清人 喜美子 鬼遊 秀信 不夫 天郎

八木摩太郎句碑建立

『ふるさと』

大仙陵の

あるところ

建設地は堺市大仙町 仁徳御陵前広場。
建設日など追って発表します。

句碑建設委員長 中島生々庵
(麻生霞乃・阿部孝次郎・河盛安之介・
我堂武夫・高木幸太郎)
句碑建設実行委員長 吉岡 青香



▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。書式は発表誌のように下三マスに雅号。

どんぐり川柳会

谷垣史好報

過二つあった頭も薄くなり 茂男
遊びから覚えた芸で飯が食え 生郎
稲光りもう怒った顔でなし 弘生
過の中出でからいるんこと聞え 鬼遊
稲妻が男と女の顔を斬る 修史
連休の遊び疲れは口にせず 小松園
遊んで世間見る眼は別に持ち 小松園
よう遊びよう飲みはったと墓へ水 小松園
他人からパパと呼ばれていて 遊一
稲妻があつて実りの秋を告げ 喜風
過巻きの中心日和見主義である 酔々
稲妻が落ちる仮想の避雷針 悦郎
娘は十九心に過が巻きははじめ 風郎
過一つ消えて夜明けに蚊が落ちた 風郎
遊ぶ灯へとがる心を捨てて行く 岳人
過潮が過去美しくして黄昏れる 之保
過と過ぶつかりあつていなる示談 弥春
遊ぶだけ遊んだ眉は動かぬ 美幸
過潮のような刺激の欲しい日も 幸江
吸江

オーエスケー川柳会

大坂形水報

特価品それでも比べ買わず去に 元二
公害に負けずに聞く野性の花 中野
公害を騒いだ人も自家用車 泉夢
額を字をスラスラ読んで見直され 博泉
公害を知らぬ田舎も住みにくい 健坊
足踏みをするなど書いてる社長室 亜成
公害不感症きれいな空気が知らぬまま 有一
額の目が僕の動揺知っている 一扇
説教をする背に社是の額があり 神地
神の目にでこぼこはない氏子 聖田
香煙の蔭に友の笑顔が揺れている 形水
借景の窓そのまが額になり 入仙
ビルの谷間平家にねばる老夫婦 好郎
どうくらべてみてもお隣部長さん 三幸報

七面句会

三幸報

夕涼み体一ぱい散歩する しずえ
仲直りしたい散歩に妻を呼び 勇次
川の字にお手手つないで散歩中 ひさ子
ばったりと出合うて散歩の気分消え 清和
漢方薬訪ねて外車やって来る 清夫
険悪な気配気付かぬ丸い顔 政夫
暗闇で妻が握り返してきた散歩 太茂津
北浜の気配へ眼鏡かけなおし 芳童
目なさしが恋の気配を既に知り 光治
薬屋と電気屋ネオンきこい合 凡夫
うらばんに気配も近く秋の風 清三
何よりも気配がいいと言う仲人 葵水
青酸カリみたいな部下を持つ不安 富子
熱い手に味方の気配感じとり 三幸
川柳わかやま 垂井葵水報

ガラスだと気付いて恋のUターン 十郎
八ミリを廻わせば祖母が生きていた 大輪
ハツ当りされるところにいた不運 富子
米寿まで生きクラーの部屋で逝き 上野
大胆に女着替えるスリガラス 城石
すりガラス越し泣いてるのがわかり 日満
カットガラスゼロが重っている重さ 弘生
ガラスふく手が進まない思いごと 与史
浮いた話出たこと夏の夢さめる 夫
他人ゆえ楽しく眺む裸婦写真 政夫
若き血の海のしぶきにたぎるもの 寛一
こぬか雨ガラスが汗をかいたよう 武雄
宝石に似すぎガラスの出来心 よし
八百長といふが馬にもコンディション 好郎
妻だけがわけを知ってるハツ当り 太茂津
八十才恋語るとき遠く見る 千寿子
公害の空へせめても窓みがく 葵水
若肌へしぶき弾けて夏光る 恭
名案が浮ばず頬杖解いてゐる 恭
京都・塔の会 松川杜報

かしの式わびしき栄華みせられる 水客
こつたのある日母への長い文 王石
一丁も一里に見えぬ八文字 善信
島原で京も場末の京ことば 和友
内八文字へカマアングルと下げ 杜鳥
角屋から昔のままの太夫出入 飛鳥
国資の来る日角屋へ灯が出入 誠史
スナックで酔い島原の頃を云い 蘇堂
下校して今日は道中に出る化粧 求芽
南海電鉄川柳会(大阪市) 辻圭水報
サーカスががてらピエロが見付からず 儀一

綱渡りハラハラさせるのも演技
明日はどの町かサーカスの旅暮し
サーカスちへライオンすなおなり
空中ブランコ生命のリズムと受け
空中ブランコの動きに客の瞳も動く
夜遊びはサーカス団にさらわれる
サーカスの時代はなれをして楽し
連れ戻したサーカスの娘へ思慕の月
金三

川柳さやま

河原みの報

紅一点今はセピアの色に
紅一点女代表する意見とおる
紅一点男はあほなものと知り
ばあさんは女学校出やと腰伸ばし
赤軍派大学出なきや入れない
文盲の亡母七人の子を育て
もうそれを云うなと彼の目が知らせ
弱点があるがビチビチした若さ
ウイスキーひとりで飲む女過去があり
ウイスキーひとりで飲む女過去があり
夕立ちのようねと新幹線の窓
俄雨金魚屋だけが慌てない
夕立ちの一徹者奴と陽も笑い
夕立ちが晴れてさよなら云いなおし
夕立ちのあとさりげなく虹がたち
川柳大阪 児島与呂志報
浅はかな女と知った独居房
退職金こんなものかい電算機
甲斐性がある成程よく使い
世辞一つ云えぬ愚さはがゆがり
機嫌とる孫年金が当てらしい
母の顔見られる楽しい里帰り
誓二

初孫とお話は只笑うだけ
楽しみの盆栽妻の水で生き
先生のあげ足をとる記憶力
茶柱を笑いあつて老夫婦
蛙鳴く道を初孫に歌わされ
不逞なる議論に浅い若さ見る
雨天順延てる坊主に八つ当り
年金の年へ若さが背をむける
年金をアテに女房肥り出し
改札を運刻の定期走り抜け
冬山の恐さ体験してわかれ
仏滅であつさりバレたズル休み
のぞいてる眼が恐ろしい程おびえ
まるべに川柳会 村田瓢太報
もう少し寝そべっていた利尻島
熱帯魚も動きをとめるひるさがり
本廻りだから廻りだか時が去る
ファッションと言う名で脱ぎ薄着
逆転の幸運つかむ優勝戦
カンカン照り隣の赤ちゃん泣きま
山鉦巡幸さぞ暑かろうと見るテレビ
高知川柳社 川竹松風報
触角のにぶい男の一人ぼち
触れる手が愛の重さを確かめる
不用意な言葉心の傷に触れ
胎動へ夫の指が触れてみる
手も触れず星の話をして別れ
ステテコになる気友もそう思い
八月の川は流れずメタンガス
理想とは別に夫の背が低い
ダイヤルを回し動悸を調える
秀子

計算のあるダイヤルへ赤い爪
ダイヤルへ不倫の指が又動き
良心にふれてとほける二日酔
女房が来て客間のとほけ顔
六月を不吉とされている家系
さんざんと照る太陽にある死
恍惚の人はお世話になった人
文庫本読んで嫁入りもう近い
マルクスを読むゴム長の女か
水道の出が悪くなる日の暑さ
城北明朗会 川口弘生報
三回も聞き返されず生返事
3DKやつと身分も安定し
長生きへ三度替った和尚くる
三文判たつぷり捺して暮の金
髪結いの母系三代古き雛
三次会やつと逃れてぶぶ漬屋
群衆が去つて春の陽地にこほれ
しずくまで緑に染めて五月雨
夕立に女忘れた走りよう
喝采を浴びてピエロに耐えている
音もせず散った牡丹のみだらなる
褒めめせず叱りもせず論す父
人生は長いシゲナル青を待つ
制服を脱げば規則のない軽さ
庭石となり安住の地を見つけ
埋れ火の如く善人目立たない
秀子

佳句地10選(前月号から)

川竹松風選

柳影
真史
与史
滋史
あき
河舟
千翁
寿翁
一翁
秀路
蜂

三味線を離さぬ末席のノド 三十四
税務署を出たら三月の陽が温い 弘生
血統の証明三才の孫頑固 太茂津
中三にボルノの意味を尋ねられ 鉄児
七五三孫を並べて嫁をほめ 志生
三味線を持つ娘もつれてダラリ帯 繁子
お雛様みるよりお相伴の方がせき 春果
三人でとめとく事に気が揃い 秀村
雛段にあなた飾りて眺めたい まする
ばかばかうきうき野路をぶらぶら 濁水
和服の娘着せる苦勞に着る苦勞 ね
おみくじが大吉と出て心和む つね

川柳しんぐう

大矢十郎報

養殖の鰻に野性の味が無い 雀踊子
汚染の鰻ではないかと聞いて買入 入道
風鈴に余韻を残し風去る 榮まさ子
むし暑い夜へ風鈴暇な顔 としよ
風鈴のかすかな音に昼寝する 純滋
風鈴に我が句を吊し楽しい日 大輪
落語家の手拭いろんな物に化け 弥三郎
働いた汗を手拭知っている 富子
生ビール待つてシャワーを急がせる 喜一
負けても試合シャワーが突きささり 牧人
水着ジワジワ真水に代きどシャワー 十郎
シャワー浴びて逆転勝ちの汗を拭く 牧人
夕立ちをシャワー代りに子は育ち 十郎
ハワイ川柳ウイロー社 林蒼蛇樓報
まだまだと働く老父の太い腕 河舟
血と汗の働き実のり今日の幸 快夢起
軽妙な舌へ働きついて来ず 三石
晩酌へ明日も働く腕を見せ 千枝女

こつこつと蔭の働き見とめられ かつよ
はたらかぬ白魚の指で汗知らず カロ女
パイオニアの汗が楽園築き上げ 水泡
親に似ぬ働き者で夫したこの惨事 峯圓
ニューカーにかえて夫婦が共稼ぎ 美和
働いた苦勞みのつて楽隠居 公女
恙なく働く日々に感謝する 万里歩
働いてた額に光る汗をふき 嘯山
使命なり働き蜂はよくかせぐ 柳子郎
蔭の働きやつと昔から認められ 暁舟
働いて飲むコップ酒のさわやかさ 稠雄
人の為額に汗した満足感 北吉
この肌も労働十年ハワイ色 北海
節くれた指の思い出今 美千香
振り返える働き通したわが半生 雪雲
生きて居るよるこび今日も働ける 雪女
働きのないのが最初に喋り出し 雪山
働いて始めて知った金の価値 拝山
働きは有るが短気が玉にきず エス子
働ける今の身の幸かみしめる 蒼蛇樓
川柳たけはら 森井青龍報
露路裏に住んで真夏の陽がまとも 静水
以心伝心無駄口もなく作業台 房子
いまひとつ欲しい子供に恵まれず 浄美
顔が見えないから電話ありがたい 蘭幸
足音を貴方と決めてふり向かず 笑子
新婚になみだの章もすこしあり 文晴
中年のあわれ炎になれず 政己
四つ玉の算盤ばかり年思ふ 貞子
趣味で持つ絵筆名もなく老いてゆく 雅鳳
水をちようば原爆の子等しじまから のぼら

黄銅六角ボルトナット
及び特殊換物全般

合資 西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地

TEL 側 三四五一 四

夜間 側 四四〇 八

子に古き言われ成程俺も齢 英詩
戦争を憎む思い出の中の初恋よ 不朽
あじさいの花ゴラスの如く揺れ 文明
夕焼けて明日が僕を待っている 一路
あおいうみフエリーボートはつようね いと
叔父の死に浮世のあわれ教えられ そのみ
親の夢子の夢花火の下に佇む 青居
過疎の灯のボツリボツリと生きて 鬼焼
ふりきつたつもの思慕に追いつく 酉合
悔恨の瞳は開けたまま凍り 扇水
一応は教科書ドサリと夏休暇 千代美
川柳東大阪 竹中肖二報
ひっそりと日照権も云わず住み 小松園
心電図だけを見つめてひそと生き 悦郎
流す湯もひっそり母の終い風呂 誓二
通り抜けずんでひっそり散る桜 幸
ひっそりと女ひっそりの城までも 好一
飛鳥路の重文の家門開かず 三十四

鬼ごつたやっぱ好きな人を追い
 白痴美の姫の話も城に来て
 城趾の百合ソロモンをあざわらう
 由緒ある校舎城趾を語り継ぐ
 義理があるように城趾も案内され
 神様に結ばせ裁判所でほどこき
 うるたえた出雲は三人結びつけ
 小包の結び目へ夫の力借る
 春の風いつか大人の恋となる
 出稼ぎが戻らぬままて春の風
 春の風女へ翼となる言葉
 春風が二人の仲をたしかめる
 倅せの噂を運ぶ春の風
 銅像にあるご遺徳を信じきる
 青錆が出たので銅やと見直され
 板前の意気銅鍋を磨き上げ
 春風に軽く押される車椅子
 一度の失敗が見をせばめ
 ご近所へ詫言の重なる子が育ち
 神様の慈悲人間に隙がある
 隙のない男埋葬料値切る
 倅せなくらしに馴れた隙が出来
 アップで撮れば黒子も演技する画面
 積み上げた雑誌下から抜いて
 焼香へ立つ表情を整える
 聖書持つ手に汚れた手を重ね
 定退へ机は涙知って居り
 問題児母には別の面を見せ
 口真一文字ストへ表情かたくする
 金ですまないと表情慌ててる

儀一 古方 柳宏子 葵水 弘生 鶴声 あいき 俊夫 文秋 雀踊子 弥生 肖二 喜風 凡九郎 綾女 酔々 柳志 作二 柳秋 俊夫 文秋 好一 静香 綾女 綾女 三十四 恒明

南大阪川柳会

金井文秋報

隙のない構えで踏んだ落とし穴
 隙見せて女何かを期待する
 表情をさっと見る子で不倅せ
 了見を替えて蒸発してしまいい
 了見を訊す自分かこそばゆい
 ゆき詰る問題矢張り老の知恵
 家計簿の愚痴聞いている夜の机
 隙のない男に心の友がない
 心配も重ねて対話流れ込む
 利口のようにでも凡夫の隙だらけ
 大学の机はバリケードにも変り
 酔眼へホステス妻に見えはじめ
 八尾菜の花川柳会 飯田悦郎報

まだ残暑つづく見舞いになさき
 朝鮮のうなぎ日本の膳を占め
 馬穴から逃げたうなぎに踊られ
 底をつかうなぎ養殖らしき味
 吹けば飛ぶ地位でも家で妻待つ
 吹きだまりに生きる命のたくましく
 吹けば飛ぶ五尺三寸山が好き
 吹き抜ける風へ定年襟を立て
 吹く風に青い炎を流し去る
 コンニャクに処世の術を聞いてみる
 コンニャク問答髭さんと禿げたのと
 コンニャクのような男でよう儲け
 コンニャクを煮るオデンと名が変り
 コンニャクの講義している縄のれん
 出口だけのが混線する俄か雨
 出入口隅で刑事の目が光り
 野良犬がちよっと覗いた出入口
 いざという時にとたしかむ出入口

柳宏子 君万子 儀一 肖二 喜風 静馬 智子 葵水 誓雅 柳信 弥生 鶴声 儀一 喜風 綾女 雀踊子 岳人 美幸 百子 凡九郎 薰風 葉二 肖郎 悦雨 牧人 酔々 頂留子

第25回大阪文化祭川柳大会

給料日女が来てる出入口
 辛口に生まれ女将として育ち
 辛口もいっしょに見てる給細工
 辛口が浪速の味に馴染まれず
 辛口がすぐまといめてる三次会
 作戦を女涼しい瞳で笑い
 作戦がすぎて女の瞳が濁り
 作戦変更赤鉛筆をまた削り
 給料日女が来てる出入口
 辛口に生まれ女将として育ち
 辛口もいっしょに見てる給細工
 辛口が浪速の味に馴染まれず
 辛口がすぐまといめてる三次会
 作戦を女涼しい瞳で笑い
 作戦がすぎて女の瞳が濁り
 作戦変更赤鉛筆をまた削り

日 時 11月11日(日) 10時開場—12時半開
 会 中央公会堂(3階小集会室)

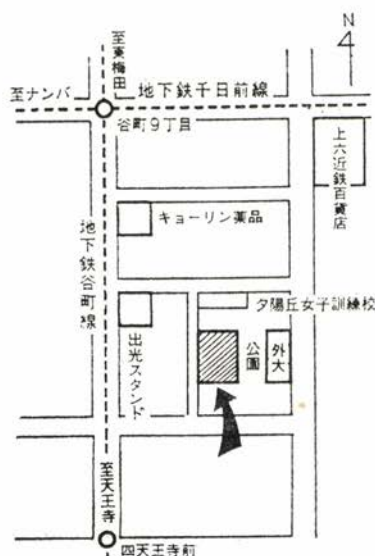
兼 講 演 場 中央公会堂(3階小集会室)
 兼 演 題 「私は人間です」 堀口 塊人氏
 「近頃の社会記事から」 広瀬 反省選
 「つつけ焼刃」 中島生々庵選
 「神」 永田 帆船選
 「橋」 谷口 光徳選
 「大阪名物」 岸田万彩郎選
 「城」 久保田以兆選

席 題 各題2句以内(締切正午) 出句は出
 席者に限ります。

賞 席・兼題とも秀句に、府知事、大阪
 市長、府市教育委員長から川柳賞。
 選者から「選者賞」を贈呈します。
 入選句集は三〇〇円。当日申込受付
 主催、大阪府・大阪市・大阪府教育
 委員会・大阪府教育委員会

句 集

10月句会の会場



11月4日(日)の橘高薫風著
「肉眼」刊行記念句会もこの
会場で開催いたします。

募集

十二月号発表(10月15日締切)

川柳塔(10句) 若本多久志 選
水煙抄(10句) 北川春巢 選
課題吟(各題5句以内)

「クリスマス」 八木千代 選
「納め」 中川滋雀 選
「助け合い」 室谷徹舟 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限りま
す。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

一月号発表(11月15日締切)

川柳塔(10句) 若本多久志 選
水煙抄(10句) 北川春巢 選
課題吟(各題5句以内)

「虎」 宮川珠笑 選
「振り袖」 林瑞枝 選
「日の丸」 水粉千翁 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字
は楷書で新かなづかいにしてください。

前月号は30日に発送しました

お買物は
4都を結ぶ
大丸へ!



定価 二百円(送料十六円)
半年分 千二百九十円(送料共)
一年分 二千四百円(送料共)
昭和四十八年 九月二十五日印刷
昭和四十八年 十月一日発行

編集 大阪府東淀川区谷津之町一〇番地
発行人 中島蓬太郎
印刷所 太陽印刷株式会社
郵便番号 542
発行所 川柳塔社
大阪府東淀川区谷津之町一〇番地
電話 大阪・二七一三九八五番
振替口座 大阪・三三三八八番

・ペンペン草・

★48年度の二賞決まる。

★プロボクシング初のダブ
ル世界タイトルマッチが九
月一日、日本武道館でおこ
なわれた。十月七日は川柳
塔のダブル賞発表だ。路郎
賞は小浜牧人氏、川柳塔賞
は堀江芳子さん。正則氏と
ご夫婦のチャンピオンは珍
しい。おめでとう。

★十月一日は「新聞の日」
だが、新聞週間も今年で第
三五回を迎えた。第二回目
の新聞週間標語は、「自由

疲労回復・肩こり・神経痛に

アリナミンA

☆25ミリ錠・ほかに5ミリ錠

☆食後すぐのむのが効果的です

☆くわしくは医師や薬局・薬店で



タケダ

28

な新聞と独裁者は共存しな
い」だった。ほくはこの標
語がいちばん好きだ。なん
となれば「新聞」を「川柳
塔」と置きかえてごろうじ
ませ、ピッタリでしょうが
ナ。

★ほくが新聞の活字にあこ
がれをもったのは少年時代
からで、その当時は母方の
伯父がBKの第一回のアナ
ウンサーだったから、新聞
に伯父の写真や名がよく出
ていたし、また父方の伯父
がアメリカ帰りの科学者とし
て持てはやされていたの
で、すごく新聞の活字とい
うものに魅力を感じたもの
である。自分も新聞に名を
出してみたい。こんな

葉子コーナー

▼毎月送本がすむと向い
の地下の茶店へ寄ること
になっています。薫風、
天笑、岳人皆様は常連で
史好、修史、悦郎の皆様
は準常連。白柳様の好み
きだったアイスクリーム
をいっただくと「コーヒ
ーを飲まないといメーシ
が毀れるよ」とよく冷やか
されます。

他愛もない願いが新聞の投
稿へ走らせたようである。

★母方の叔父が白系露人の
女性とロシアで恋におち、
それが国際情勢の渦に巻き
こまれ、それらのことが、
「国際愛の破局」という大

見出しで新聞に載ったこ
とがある。この時も叔父が
英雄に見えたものである。
自分も新聞に写真を出して
みたい。笑ってくださ
るな、その当時は真剣にそ
う思っていたのである。

★国が敗れたおかげで、
ほくのような者でも何度か
新聞に写真を出してもらっ
たし、今でも小遣いをかせ
がせてもらっている。ほく
にとって新聞はカミ様であ
る。

★ほくの誕生日に、久米奈
良子さんが、ほくの生れた
年月日入りの新聞をコピー
して送ってくれた。まことに
貴重なものである。別に
年を隠すわけでもない
が、こよみなどではく的年
を見ると「え！オレはそん
な年になってるのか」と幻
滅を感じながら、年を聞か
れると先方様のお見立てま
かせにしている。

夢が広がるシヨツピング
近鉄がお届けします



アヘノ近鉄 TEL 621-1231



上本町近鉄 TEL 779-1231



奈良近鉄 TEL 33-1111

アヘノ町良
上奈

近鉄

★ちよっと種明かしをして
おこう。この新聞に『東宮
御所に於て大山元帥』云々
の記事がある。(大山巖元
帥は天保13・10・10大正
五年12・10)

★もう一つ。「名古屋の東
京相撲、昨日の勝負は左の
如し」とあってその中入後
に「伊勢ノ浜(うちがけ)・
小柳・緑島(よりきり)・
錦洋一・荒岩(よりきり)・
逆鉦一。常陸山(よりきり)・
大砲一。駒ヶ嶽(うわてな
げ)・梅ヶ谷」とある。この
ほか名力士玉椿の名も見え
る。太刀山がまだ台頭して

いなかった頃である。常陸
山(初代出羽ノ海)が関脇
か、梅ヶ谷の大関か、横綱
時代で(その後に独裁出羽
ノ海時代が来る。)梅ヶ谷
が12代横綱。輪島が54代横
綱だから気が遠くなる。

★軍人の最高位は元帥、力
士は横綱だが、二賞受賞者
はうちの本年度の最高位を
かち得た人たちである。こ
れが芥川賞・直木賞のよう
に、新聞で騒がれるように
したいものです。夢の一
つぐらいは大きくもちまし
よう。

(不二田一三夫)

